

Title	楊絳の「彼女の語り」
Sub Title	Yang Jiang's "Her story"
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.40 (2025.) ,p.280 (53)- 332 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20250630-0280

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楊絳の「彼女の語り」^①

櫻庭 ゆみ子

はじめに

今回翻訳紹介するのは、前回その小説『洗澡』におけるアイロニーの妙を紹介した作家、楊絳の散文集、『走到人生边上（人生の際に来て）^②』に収められた少々変わったテキストである。「她的自述『彼女の語り』」と名付けられたこの一篇は、農村から北京に出稼ぎに出てきた家政婦の女性が語った半生の記述である。このテキストのどこが変わっているのかを説明する前に、まず『走到人生边上』という散文集について簡単に紹介しておこう。まず序文は次のような書き出しで始まっている。

「二〇〇五年一月六日、私は退院し三里河の住まいに戻った。病院は正面玄関から出てきた。もし裏口の太平の間（靈安室）から出てきたのだとしたら、「（あの世へ）お戻り」となるところだった」

いつもの楊絳らしい軽いユーモアを交えた物言いだが、続く本文は、生と死をめぐる重いテーマを扱ったもので、

九五歳になった楊絳が二年の歳月をかけて行った人生の総括の軌跡が示されていると言つてよい。ほぼ書き下ろしの単行本である。⁽³⁾そこでは人間が肉体と魂を具へ持った存在であると捉えられ、人としてよりよく生きるにはどうしたらよいのか、生きる意味とはなにか、「靈魂」とも呼びうる「私」は最終的にどうなるのか等が自問自答の形で順に説かれている。「命」や「靈魂」の言葉の定義が始まって、魂の存在についての議論へと論を展開しつつ、⁽⁴⁾中国の古典に現れる「鬼」「靈魂・幽鬼」の話や自ら体験したり伝え聞いた不思議な話を挿入しながら最後は「靈魂の問題について私が何を知り得ようか」という問いで終わる。⁽⁵⁾そしてこの本文のあとに「注釈」と称する十四篇の散文が附され、⁽⁶⁾女学校時代から、戦中、戦後、二十一世紀の今日までに見聞きしたこと、或いは読んだものを通じてままならぬ人生、不可思議な出来事に翻弄される人間たちの無力さが示され、それでも良心なるものに従うか背くかの選択は「私」に委ねられているのだという結論も導き出されている。⁽⁷⁾

「本文」、「注釈」ともにいかにも楊絳らしい卑近な具体例をあげての説明は、ややもすると一般論的な人生訓の印象を与えかねない。⁽⁸⁾しかし、共産党政権下で権威を持ち／持っている唯物史観イデオロギーに縛られない語り口の人々は惹かれたのだろうか、二〇〇七年八月の初版からわずか八か月で九刷り、十八万冊の売り上げがあったという。⁽⁹⁾そこで今回翻訳紹介する「彼女の語り」だが、これは本文のあとに収められた「注釈」十四編の散文の第十二編目に当たる。⁽¹⁰⁾ままならぬ人生の一つの例として「彼女」の語る物語は確かに人生なるものを考えさせ、概念を具象化して例とする「注釈」の役割をはたしている。内容から言えば『走到人生边上』に収められても不自然ではない。ところが、実はこの作品に限って他の十三編の「注釈」とは形態もジャンルもそして発表時期も大きく異なっており、長さも他の、長くて二、三頁の十三編を大きく超える一つの独立したテキストとなっている。

まず執筆時期だが、他の十三編の「注釈」は『走到人生边上』の構想を得た二〇〇五年から二〇〇七年あたりに書かれているが、「彼女の語り」のみは十年以上にさかのぼった一九九五年の執筆である。¹¹ 時期がこれだけずれたものを収録し、そして二〇一四年刊行の全集にも『走到人生边上』と同じ編集そのままに収められているのはそれだけこの作品への愛着、あるいはこだわりがあるとみてよい。一九九五年といえば、前年の夏に楊絳の夫、錢鍾書が肺炎で入院、膀胱癌の摘出手術をうけた後も体調が回復せずに入院を続けており、その対応に追われていた時期である。夫の経鼻経管栄養摂取のために自ら流動食を用意するなど大変な日々であったのは確かであるが、翌年一九九六年十一月以降の愛娘の入院と三か月後の死、その一年半後に夫の死を迎えることになる悲劇の前の段階、つまり作家の生活が激変する直前の、まだ新たな試みに取り掛かる意欲が続いていた最後の時期であったとはいえる。

作品形態も、楊絳本人、または楊絳が見聞きした人物についてそのエピソードを語るのではなく、他の女性が半生をひとり語りで語っており、楊絳がそれを聞き書きしたという形をとる。作家は過去にも家事手伝いの女性との会話を中心とした散文を何編か書いているが、ストーリーを引っ張るのはあくまで語り手＝楊絳であって、このように全編を通じて他の女性の一人語りで物語が進む形をとるのはこれが初めてである。そして結果的には楊絳の作品全体の中で唯一の聞き書きスタイルとなっている。語り手の女性は、楊絳の夫、錢鍾書の入院生活に泊りがけで付き添っていた楊絳が体調を壊し、付き添いの看護人を頼んだその人物であるという。¹²

彼女の存在、その語る話について楊絳は「すべて事実である。私は聞き書きしただけである」と文章のはじめに添え書きを寄せている。「想像したおはなしではない」と「事実」を強調している。

楊絳は従来の回想録でもよく、「これは事実である」と条件付けをする。真実と事実の関係をろうそくの発火点と

その反射になぞらえたように、楊絳⁽¹⁵⁾という書き手は、想像の世界から物語を紡ぎだすのではない、発火点の「出来事」が書く契機となる作家である。彼女の回想録、散文、随筆といった本人署名の作品のほか、日中戦争時期の三〇代で手掛けた脚本、前回論じた小説「洗澡」にしても、リアリズム、すなわち限りなく現実に近い虚構スタイルをとる。真実をめぐる事実を提示するその表現方法が多様であることは熟知している。そういう作家の言葉であるから、逆に、「彼女」の話したそのままを「書き記した」その記し方に創意工夫があることは言わずもがなの前提であり、つまり「事実」ではあってもいかに書くかに工夫を凝らした再創造の範疇にあることは十分承知したうえで言うことを忘れてはならない。それでも他者のことばで話をつなげていく形式は従来の楊絳が語り手となって語るスタイルとはかなり違う。「彼女の語り」はいわば再話に近い、ジャンル越えの作品であるとも言いうる。

それから、この物語には話の「オチ」がない。それは従来の回想録、散文における語りとも、『走到人生边上』の他の注釈の十三編とも違っている。楊絳はまず「彼女の語り」の前置きで、「後半はくどいので省略した」と述べ、「語りの最後を「あたしは一生を何のために生きているのでございましょうか」と「彼女」の嘆きの言葉で終わらせており、納得するようなけりをつけていない。そのため、不幸な彼女も最後にはなにかの満足を得るのではないかという読み手の予想はあっさり裏切られ、尻切れトンボのような落ち着きの悪さに当惑すら覚えさせられる。これは「くどいから省略した」というよりはあえてそこで話を切ったのであり、そこにはオチをつけ物語として完結させて状況にけりをつけてはならない、という楊絳の一つの姿勢が示されているように思われる。

このように、聞き書きによる再話というジャンル越えをしたスタイルと、読み手が腑に落ちるような結末をつけずに物語として完結させない、というありかたは、作家の従来の書き方と大きく違っている。一九九五年以降の作家を

取り巻く状況の変化によってこういった聞き書きのスタイルの発展は見なかったものの、つまり、この試みは、楊絳の、その円熟した語りの技術を十二分に発揮した新たな試みだったのではないかということである。

そしてその試みを行わせた意識は、彼女の言葉を扱う知識人として生きる姿勢にかかわるものであったからこそ、他の散文とは趣を異にしているもあえて『走到人生边上』に収めたのではないだろうか。

楊絳は文壇「再デビュー」の『幹校六記』からその後矢継ぎ早に書かれた回想録、エッセイ等で、経済的、文化的違いによって引き起こされる差別、相いれない階層の存在、そして自分が恵まれた側にいることで感じる引け目、疚しさ、といったものにたびたび言及している。⁽¹⁶⁾ 一九五〇年代より度重なる政治運動、引き続き文化大革命で迫害を受け、下放地での現地農民から拒絶され、社会的地位の浮き沈みを経たことでより一層、いわゆる階層の溝の深さ、人間理解の難しさを切実に感得するようになったといえる。弁護士であった父の影響もあっただろうが、現に存在する社会的不平等といったもののへの敏感なセンサーが常に働き、せめて書くことを通して現実のゆがみをイメージ化して示すというのが、知識人としての気概を持つ楊絳という作家の基本姿勢である。つまり、この「聞き書き」は、知識人として教育を受け社会的に優位な立場にある者が、そこまで恵まれずに沈黙を強いられる人々の声に耳を傾け、その声を掬い上げ自らの創作に反映させようとするのに適した方法の試みだったと考えられるのである。

そこで「彼女の語り」だが、「彼女」すなわち秀秀と呼ばれる女性には安徽省の貧しい農村出身である。苦労を重ねてきた一人の介護人である女性の淡々と語られる話から、読み手は、男尊女卑と迷信がはびこる農村地域の閉鎖性、貧弱な医療環境、共産党の下部組織と農村の微妙な人間関係、離縁された母子家庭の悲惨な生活、大躍進の失敗と自然災害から引き起こされた大飢饉の状況、文革終結後、経済改革が進められる中でとりのこされていく農村の実情と

都市における特権階級の内部事情等、困難な状況で知恵を働かせて生き抜く人間のしぶとさとともに、中国現代史における農村の現実、農民と都市生活者との格差の実情を知ることになる。

中華人民共和国成立の年に生まれたこの秀秀のたどる道は、本来は共産党の主役であるはずの農民が実際には社会改革から取り残され、社会の底辺で食うや食わずの生活を送らざるを得なかったその歩みと重なっている。そして、語りが秀秀の母親からの聞き書きという形で曾祖父の時代にまで遡って説き起されることによって、秀秀の物語は民国末から現代に連なる中国の農村における一つの現代史となり、数奇な運命に翻弄される語り手の目を通じて具体的なイメージが読み手の前に示されることになる。文化大革命において名目は最上位の階層に持ち上げられた「貧農」は現実には移動の自由すら制限された農奴のような生活を強いられた存在であったが、中でも女性はさらに慣習に縛られ発言力も奪われた存在になっていたことが見事に具象化されている。中国現代文学において農民は常に描かれる対象であって、自らを描く主体ではなかった。かろうじて文字認識ができる程度の文化水準では自らの言葉を表現する手段は奪われており、またその手段を獲得した時にはすでにその「階層」からは離脱することになり、ゆえに、「我々」と「彼ら」との溝は埋められない矛盾が生じる。特に最下層にいる女性は自らの「今ここ」の状態を社会に訴えかける手段を持ちえず、その声は届かない。いわゆるサバルタンは語ることができないのである。

「彼女たち」の言葉はいわゆる代弁者の言葉を通してのみ表現されうる、が、そこではすでに代弁者の言語コードによる代弁者の側の見方が入らざるを得ない。秀秀は独学とはいえ、文中にあるように伝統的な舞台芝居の役者として型としての語りの手法を学び、それが自らの半生を語る際にも生かされているものとは思われる。しかし、それは口述のコードであり、書き言葉としてのコードとは異なるものである。文章化してより多くの人々に知らしめるテク

ストにするには、書く技術の訓練が要請される。秀秀は生存が優先される農村地域の教育環境、そしてのちの生活環境によってこういった文化的「能力」を獲得する機会を持ちえていない。ひるがえって、秀秀の話を聞いた楊絳の方は、八十を超えて自らの身体が衰える中で夫の看病の負担が加わり、現代社会において女性であることの不合理性を改めて認識したのかもしれない。以前に論じたことがあるが、楊絳という作家は、近代の枠組みでとらえるといわゆる「近代的家族」の枠組みにかなり忠実な良き娘、妻、母親である。基本的にそういった役割に合致する思惟形態を持つ。所謂「反逆する娘」ではない。卓越した文学者である夫錢鍾書を常に優先させ、その強力な補佐を受けて彼女独自のスタイルを確立し、執筆活動を続けてきた。それが、その夫が倒れ、看病と生活面の雑事に疲労困憊していた時に秀秀に出会い、女性ならではの苦労に満ちた人生を聞くことになった。相手に女性ならではの共感を寄せたとしても不思議ではない。そこに、彼女の語る半生を文字として人々が読みうるテキストに編みこんでみたいという作家としての要請が働いたのではないか。

文化的社会的優位にあるものがその特権を意識しつつ、公の場で語ることでできない女性のつばやきに耳を傾け、限界を知りつつ寄り添うようにして言葉を引き出し、それを再構築して読みのコードにはめ込んでいく。ずれと溝を受け入れつつ、限界を知りつつ、イメージを喚起し、共感しながら意味ある文脈を構築してゆく。このようにして代弁者になるというのはそれ自身が矛盾を含んだ行為である。しかし、理想と分かりつつこの行為の可能性に少しでも近づくように語りを構築してみること、これが「彼女の語り」で楊絳が行ったことなのではないだろうか。¹⁷

楊絳の世代の知識人は、文革に至る迫害の歴史を生きてきた。そして一度はすべての特権を剥奪されて最低層に貶められる体験も経ており、社会の階層を上り下りしている。その分、相手方の状況への共感を感じうる条件は整って

いる。「明日は我が身」を味わうことで、他者への理解に至る感度は研ぎ澄まされている。

そして楊絳は言葉を使う訓練を生涯にわたって続けてきた、自ら修練に励む文学者―言葉の使い手である。一九四〇年代に劇の脚本を手掛けたことから知られるように、彼女は人間のさまざまな階層の会話に興味を持ち、それを書き言葉に直して物語ることを得意としてきた。卑近な人々の苦しみの多い人生を距離を少し置いて描写し、読み手に見せる。具象化し社会のゆがみを見せ、同時にままたぬ人生の意味を自らも考えまた読み手に考えさせる。これは楊絳が一貫して行ってきた人間探求の手法である。

彼女が優れた翻訳者＝精読するもの＝対象の伴走者であることも忘れてはならない。一九五〇年代より、ピカレスク小説の始祖、『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』⁽¹⁸⁾に始まり、『ジルブラース』⁽¹⁹⁾『ドン・キホーテ』⁽²⁰⁾といった絶妙な会話で物語が進む物語を、はじめは英訳から、後に原文のフランス語、あるいはスペイン語から訳し直し、晩年に至るまで何度も修正を行いながら、魯迅をはじめ、茅盾、巴金等中国現代文学を代表する多くの作家がそうであったように、楊絳も創作と翻訳を並行して行ってきた。彼女は巧みな会話表現の手法を生涯をかけて続けた翻訳作業から学んできている。特に「ひとり語り」の手法は、彼女の愛するピカレスク小説の鼻祖『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』⁽²¹⁾の翻訳を通じて自家薬籠中の物にしているといつてよい。秀秀の話に出会ったことが、理論を実践する動機になったとも考えられる。

彼女は「紹介『小癩子』」⁽²²⁾『ラサリーリヨ・デ・トルメスの生涯』の紹介」で「(この作品の書き手は)言葉を簡潔で生き生きと語ることで真実味を引き出している」と述べ、また「實在人物や本当のことの価値は、すべて作者がいかにように切り取るにかかっている」⁽²³⁾と述べており、如何に語るかに作家の芸術的修練の成果が示されることを熟知

している。

そしてまた「彼女」の「語り」が示す、ジェンダーの規定、書き言葉と話し言葉の関係、方言と標準語の書き言葉の様相といった要素は書き手と読み手の言語コードの双方に受け入れられるものでなくてはならない。そうでなければ不自然な表現となり、ストーリーは読み／聴き進められないものとなる。声を届けるためには読むに堪える言語へと取捨選択、錬磨が必要となる。楊絳は俗っぽくなりすぎず、高尚にもなりすぎない現代中国語のわかりやすい言葉を巧みに選び、生き生きとした語りのリズムを手際よく文字に落とし込む技法を翻訳作業から学び、その技巧を生かして口述を文章化し、テキストとして示した。「彼女の語り」では聞き取りの過程でおそらくは前後の脈絡が通じなかったり、混乱したり、登場する人々の関係がはつきりしなかったりと、様々な乱れがあったことが推測されるが、それを「一本の縄で束ねるように、散漫なエピソードを銅貨の穴に縄を通して一本につなげる」⁽²³⁾ようにして意味の分ける話へとつなげていったのである。

こうして得てして悲惨な状況にあるヒロインの悲しいお話というメロドラマに陥ることなく、人生の節目で迷いながらもそれでも生き方を選択した秀秀の高潔さが素直に伝わってくる語りが出来上がったのである。そしてオチをつけずにいきなり終わらせたことで、読み手を心地よい虚構の物語の夢から覚まし、居心地の悪い、冷たく厳しい現実世界へと引き戻し、そのことによって、物語世界ではなくこちら側の冷酷な現実に生きる彼女の存在を悟らせる。

「彼女の語り」は、書くことから疎外され伝える力を持たないものの語りを文字化して一つの力のあるテキストとして示すことに成功している。文学的手法を使って透かし彫りにされた現実を通して真実を示して見せる、いわば文学の力が発揮された一つの例になっている。それは楊絳という作家の人生と文学的修練が凝縮された最後の新たな試

みであつたと考えられるのである。

最後に邦訳についてであるが、日本語と中国語とは当然言語コードが違う。日本語は中国語に比して人称の自由度と、語尾の自由度がより高く、その分全体のトーンをどのレベルにもっていくかは訳者の裁量にゆだねられる。まず幾度か述べたように、「彼女の語り」の語り手、秀秀（おそらく実名ではない）は北京に出稼ぎでやってきた安徽省出身の四〇代半ばの女性で、家族を安徽省に残してひとり北京で働いている。私がこの楊絳の作品から受け止めた秀秀のイメージは、「北京の中・上流階層で長く働いたことにより丁寧な言葉遣いを身に着けた農村出身の誠実な女性」というものである。このイメージに沿って秀秀の言葉遣いに「です」「ます」調を採用した。当然このあたりの受け止め方は読み手によって変わってくるだろうと思う。

なお安徽省は中国でも貧しい地域であり、保母や家事、洗濯婦として上海等の都会で働く女性の多い地域として知られている。

人物呼称についてだが、中国語では親族呼称を父方と母方で分ける。父方が母方かを明示するため邦訳では中国語の呼称を使い、それぞれ初出に【一】で日本語での呼称、関係の注釈をつけた。

また、本文最後の注とは別に、語句レベルの訳についても割り注の【一】を使っている。

彼女の語り

作者のことは…この話であるが、長すぎるので収録をやめようかと思った。けれどもすべて実在の人物に実際に起きたことであり、フィクションではない。太爺爺タイイェイェ【父方の曾祖父⁽²⁵⁾】のことは創作のように感じられるだろうが、これは彼女の母親が彼女に語った伝え話である。実在の人物、実際に起きた事が小説より数奇でありながら確かに起こった出来事だということはありうるのである。後半はくどいので削除した。以下の話はすべて彼女自身が語ったものである。姓名だけは変えてある。

奥様、あなた様には想像もできないでしょう、あたしが小さい頃どんなに貧しくてどんなに辛かったか。真冬にズボン一つなくて足がむき出しになっておりまして、それは寒かったものです。二奶奶アルナイナイ【大爺爺の妻、父方の大叔母⁽²⁶⁾】のところ、ズボンカバーがありまして、使っておりませんでしたのでそれをもらってはきました。脚を入れたら、ほっこりあったかくて。でも股上の部分はありません。あたしの大舅ダジウ【母の上の兄、伯父⁽²⁷⁾】が仕立て屋でして、それで端切れを拾ってきて縫い合わせて襠まちの部分をつくったんです。まだほんの子供の時ですよ。

奥様、あたしはいい加減なことは申しません、初めからお話しいたします。でも始まりのとおはおっかさんが言っていたことです。おっかさんは正直もんで嘘を言ったことはありません。ことによっちゃあ、おっかさんだつてよく知らなかったのさうです。

あたしは安徽出身です。あたしらの村は呉村ウと言って、皆姓を呉と申しておりました。ただあたしの家は鄧ジュンです、

外もんなのです。太爺爺がカマド造りのレンガ職人として、一方の肩に布団を担ぎ、もう一方の肩には前と後に頭陀袋を提げて、一つの袋に食事の椀と箸、もう一方の袋に仕事に使う木の板と泥を塗る鋤こてをいれ、通りを巡って一軒ずつかまどをこしらえてやりました。夜は人様の軒下で適当な隅を見つけて布団にくるまって寝るのです。

ある年の冬はひどく寒うございました。大晦日にはもう何日も雪が降り積もっておりまして、そりゃひどい雪でした。どの家も表門が雪にうずまって開かなくなっちゃったんです。太爺爺は寝る場所がなくなっちゃったんで、大きな箒を買って、道みち雪をかいて道をつくっていきました。どの家もみんな金をくれましてね。太爺爺はいく晩も河の向こう岸から河まで掃いたんです。あたしらんとこの河は淮河(28)まで通じておりまして、でも淮河まではまだまだ遠かったんですけれど、あの年は河底まで凍っちゃってました。年が明けた元旦にひいじい様は大きな箒で掃きながら呉村に入っていきました。大雪で、どの家も表門が雪で埋まって開かなくなっちゃってて、通りを一つずつ掃いていたら家々で金をもらえました。開門大吉ですよ。太爺爺は夏冬の衣類をみな着込んでおりまして、シャツの上にチヨッキ、チヨッキの上に綿入れを着て、その上に裕の上着を着ておりまして、綿入れをぎゅっと押さえれば少しはあったかくなりますから。服にはみんな二つのポケットが付いておりまして、体中のポケットすべてにお金が入り、肩に引った袋二つもお金が入り。履いていたのは足首で縛るズボン、単衣を内側にはいて、裕のは綿入れのパンツの上から履いてましたが、ズボンの中も金が入り。歩くのも大変だったのでございます。

村にある金持ちがおりまして、年のいった娘がいました。その家ですが、太爺爺が働きがよくて体も大きくがっしりして容貌だつてなかなかのを見込んで、娘を嫁にやりたいと申しまして。太爺爺が正式に結納をおさめて、むこうも嫁装束を一式揃えましてね。太爺爺はそれで呉村に土地を買って家を建て田畑を耕して、農閑期には昔のように

かまど造りをやつて、こうして呉村に住み着いたんでございます。

太爺爺夫婦は三人の息子を育てて、嫁さんを三人とりました。娘はいたかどうか分かりません。あたしのじい様は長男でした。ばあ様は病弱で纏足^{てんそく}の足がそれはそれは小さかったんですよ。⁽²⁹⁾ ばあ様は初産で息子を生んで、それがあたしのおつとさん。二人目は生まれませんでした。おつとさんは一九一六年生まれの辰年、おつかさんは一つ年下で蛇年です。二爺爺【父方の大叔父、太爺爺の次男】には女しか生まれなくて、二奶奶【父方の大祖母、上記次男の嫁】は村の産婆でね、村で女兒が生まれても要らないときは二奶奶が呼ばれて飼葉桶で溺死させちゃうんです。赤ん坊によってはなかなか死ななくて、そうなると二奶奶は上から煉瓦をのつけるんですよ。罪作りなことを仰山やりましたよ。命の償いとしてたたられまして、二奶奶に生まれてくる子はどれも女で、生まれては死んでたつた一人しか育たんかったのです。三爺爺【太爺爺の三男】は三奶奶を娶つて、息子一人に娘二人をもうけました。日本軍がうちの村にやつてきて、人を殺め^{あや}火を放ち、たくさんの家が燃やされちまつて、あたしんとも家を燃やされちまいました。その後でうちは元の家の土台の上に新しいのを建てました。じい様は正門を入った棟⁽³⁰⁾に入りましたが、二爺爺は自分とこの棟の礎石を西に少しばかり移動させ東側にちよつと場所を空けて、棟の東端に東向きの小さな出入り口を設けたのでございます。三爺爺は早くに亡くなり、家は二爺爺が厳しく管理しておりました。三奶奶の棟は二爺爺の奥にありましたけど、出入りはあたしらの家の正門を通るほかありませんでした。

あたしのおつかさんは何人子供を産んだか自分でもおぼえておりません。大きくなるまで育たなかったり、人にやったりしましたんで。一番上の姉さんはあたしより五つ歳が上で、⁽³¹⁾ 招弟^{ジャウテイ}という名をつけられて、それで弟ができたわけですけど、人にやつちまつたんです。当時おつとさんは村を逃げ出してゲリラに加わっております。じい様は

身体が弱くて、じい様が持ってた田んぼも二爺爺に耕してもらっておりました。三爺爺の土地も二爺爺が受け持ちました。三爺爺の息子はまだ幼くてございましたから。毎年二爺爺はじい様とばあ様に穀物を少々わけてまして、三奶奶とこにもまわしていました。三奶奶とこではそれで充分やっていましたけど、あたしらとこじゃ全く足りなくて。それと申しますのも、おつとさんがしょっちゅう戻ってきまして、服の継ぎ当てが必要でしたから、でも仲間も引き連れてきて食わせるんですよ。おつかさんは飯を炊くときは、いつも固い飯と粥を交互に作ってまして、そうやってとっておいした米をおつとさんに食べさせたのでございます。

徽州の人間は外に出て商いをするもんがいました。⁽³²⁾ そういった人間はみな金を持ってまして、その一人が招弟姉さんのおかげでできた息子⁽³³⁾を欲しがったんですよ。おつかさんは、自分とこじゃお腹いっぱい食べさせることもできねえし、向こうが息子をほしいうのは金があるからだ。市内に住んで食べるもんにも着るもんにもこと欠かんし、大きくなったら学校にも上げてもらえる、こう思ってた息子をあげちゃったんですよ。おつとさんは家のことは構いませんでした。うちの家の塀に崩れたとこがあつて、おつとさんは夜中にこの壁を越えてやってくるんですが、仲間も一緒に晩飯に呼ぶんですよ。その中の一人は女で八角帽⁽³⁴⁾をかぶってました。おつかさんは女だと気が付かなかったのです。この女こそ二奶奶が言う狐狸精⁽³⁵⁾、疫病神⁽³⁶⁾でした。何度もやってきたんで、二奶奶がおつかさんにそう忠告したんですが、おつかさんは耳を貸しませんでした。この女は丁っていう姓で、おつかさんより十一、おつとさんより十二、歳が下でした。

あたしのおつとさんは遊撃隊の隊長で、トーチカを探るのが得意でした。トーチカがどういうもんかあたしは知りませんが、一つ見つければ仰山の銃や弾薬が捕れるっていうことだけはわかってます。でも危ない仕事でした。ある

時なんぞ国民党の犬めに捕まっちまいまして、梁から吊り下げられました。あの犬めらは大きな手柄を立てたつてんで、飲めや歌えの大宴会開きましてね、おつとさんは両腕をきつく縛り上げられてたんですけど、身をよじつて何とか身体を伸ばして、肘を梁にもたせ掛けてたんです。奴らは、身体がぶら下がってるのは見えても、こっそり綱をかじってるのは気が付かなかったのです。それでやつらはたらふく食って酔っぱらつてあちこちでだらしく眠っちゃいました。おつとさんは綱を一本かみちぎつて片手を自由にしてから、もう一方の綱を解いて梁の間からそつと下に降りました。でも一日ぶら下げられてましたんで、体中がこわばつてひどく痛んで、その上腹はすくわ喉は渴くわで、言うことしかできません。ようやく部屋から這い出したら、外にいた犬たちが一齐に吠えだしたのです。でもごろごろ転がつてうまい具合に溝に転がり落ちて、それでとうとう逃げ出すことができたわけでございます。

うちにはよく人が捜しにやつてきました。でもおつとさんはいつも家におりませんでした。じい様は正直もので一番肝っ玉が小さくて。じい様とおつかさんのふたりは出過ぎたことは金輪際しない人たちでして、あたしのおつとさんが何やってんだか何にもわかっちゃいなかったんです。隣近所じゃあ、「この『木偶の棒でくぼうのかみさん』にわかるわけないだろう」と言っていました。おつかさんの「木偶の棒」は有名でして、と申しますのはですね、頭のめぐりが鈍くて、頑固者で、まるで棒みたいだったからです。おつかさんはでも家のことはよくやって、特にきれいな好きでね、やることも素早かったんですよ。あたしは一九四九年正月末の生まれです。丑年です。まだ立春の前でしたから。うちの農村では農歴を使ってるんで、みんな数えです。おつとさんは解放後に銅鑼や太鼓の鳴り物入りで村に戻ってきました。村長になってそれから村の小学校の校長もやりました。その時おつかさんはあたしの弟を身ごもってました。うちのじい様とばあ様はもととおつかさんの部屋の向かい側の正房に住んでました。じい様は家では一番正直

もんで、息子のことを怖がってました。おつとさんは戻ってきましたが、大勢を連れてくるんです。それでいい様が、おつとさんは客が多いけれど客をもてなす場所がない、だからおつとさんが客をもてなせるよう寝間をあげようと言いなすつたんです。老いた二人は西の廂房⁽³⁸⁾に寝起きしました。正房の中の一間は食事をするところで、かまどは、正房前のおつかさんの住む東廂房の脇にありました。おつとさんは以前は帰宅する時は壁を乗り越えてきたもんですけれど、村長になったら壁を乗り越えてくるわけにもいかなくなりまして。昼間はいつも外で食事をして、晩飯はだいたいで済ましたが、たいていみんなを引き連れて来てました。夕食が済んで同僚たちが皆いなくなった後、おつとさんはこっそり門を出てくんです。おつかさんは後から知ったんですけれど、あの丁何某^{なにがし}という女をどこだか知りませんが隠していて、毎晩女のとこに行ってたんです。あたしの姉さんはおつとさんのご機嫌取りで、夜におつとさんの代わりに表門をしめ、明け方開けてやったり、かんぬきを掛けずに閉めておいたりしたんです。

おつとさんは出かけないときは、夜かんぬきでおつかさんをなぐりました。おつかさんは大きくなった腹をかばうのが精いっぱい。あたしはほんの二歳でしたけど、おつとさんがおつかさんを殴るのを見て、おつかさんのお腹にかぶさって守ろうとしたんで、それであたしもかんぬきで殴られました。痛いなんてもんでではございませんよ。大きくなってわかったんですが、あの丁という女が、おつとさんに迫っておつかさんに離婚状へ拇印を押させようとしていたのです。おつかさんは頑として聞き入れませんでした。後におつかさんが話してくれました。「一人で実家に戻るんだつたら何とか食わしてもらえたらうけれど、子供まで一緒になんてのは無理だったよ。だからといっておまえたちを残していったら、お前なんかトンボみたいに瘦せて目ばかり大きくて、か細い手足なんか、一ひねりで折られちまう。下の弟はまだほんの赤ん坊だし、おまえたちに命があったと思うかい？」

生まれたばかりの時あたしは喘息持ちで、せき込むと目が真っ赤になるほどでした。おっかさんのおっぱいを飲んでましてね、四月（よんつき）飲んで、むつちり太っております。おっとさんの戦友で、子供ができない夫婦がいまして、あたしを欲しがったんで、おっとさんが承諾したんです。この夫婦はね、町の学問のある人にわざわざ頼んであたしに名前を付けてもらいました、秀珠^{シウジュ}っていうんです。おっかさんが嫌がりまして、真珠は高価なものだ、子供の名前は卑しければ卑しい方がいいって。おっかさんはあたしのことを秀秀^{シウシウ}としか呼びません。おっとさんの戦友夫婦はあたしのために新しい服もこさえて、それに着替えさせて抱いて出てったんです。

それでおっかさんが呆然と座っていますと、二奶奶が「また人にやっちゃったんかい、今度は一生会えなくなるよ」って言ったんです。おっかさんはあたしの姉さんが「招き寄せた」弟を人にやってしまったんですが、たぶんずっと気にかけてたんですよ。それで二奶奶にこう言われてはとしたわけでございます。やるのをやめだっと、何も言わずにいきなり立ち上がって埠頭の方に駆けだしまして。夫婦は汽船で戻るんで、夫の方はもう船に乗っていて、奥さんのほうがあたしを抱いて船に乘ろうとしておりました。おっかさんは奥さんの手からあたしをもぎ取って、くるりと身をひるがえして一気に家まで駆け戻ったんです。こうしてあたしは奪い返されたわけでございます。

おっかさんが寝る部屋は東側には窓を設けていませんでした。その外が荒地だったんです。でも窓はどうしても一つ必要ですから、東でなければ北につけます。北側には二爺爺の部屋がありました。おっとさんがおっかさんを殴るのを、二爺爺はすっかり見てまして、とうとう見かねて、すごく怒ったんです。あたしのじい様は小さいころから甘やかされて体が弱い、情けないが、まあ仕方がない。あたしのおっとさんは体もでかくて覇気ある快男児じゃないか、それが狐狸精にたぶらかされるとは、これまたなんと情けない奴だ、と申したのでございます。そして大舅と二

舅【母の次兄】に相談しに行きました。でも大舅も二舅もあたしのおつとさんを怖がっておりまして、子供が生まれたらおつかさんを大舅のところにひきとろうって言うのが精いっぱい。でも子供を産んだらお乳が必要です。産んでほっぽり出すわけにはいきませんから。おつとさんは村長で、村のみなが見てるから、妻を二人持つことはやりできません。で、おつかさんがこらえて、ほかにどこにも嫁がないし、実家にも戻らない、自分一人で生きてく、て申しましてね。それで二爺爺が間に入って、おつかさんが使ってた二間の東廂房と物置きをおつかさんのものとしたんです。東廂房の出入り口は中庭に向いており、物置きも出入り口が中庭に向いていて、廂房と正房はつながっておりまして。二爺爺はおつとさんを説得して、正房に通じる出入口を塗り固めて、中庭に通じる東廂房の出入り口も塗り固め、別に東側に出入口を一つ作ったんです。物置きの戸口はつぶしませんでした。おつかさんの方で閉めればそれで済みますから。こうやって話がまとまって、おつかさんが離婚状に指で印を押したのでございます。扉を二つ塗り固めて一つ小さな出入口を設けるのに大した手間はかかりません。おつかさんの引越は家の中で済んで、扉からでる必要ありませんでした。あたしの姉さんはこれまで通りじい様とばあ様が住んでる西廂房の端っこの表門に近いほうの部屋で寝起きすることになりました。じいさまとばあ様はふたりしておつとさんと一緒に住むことになったのでございます。

おつかさんの話では、例の丁という女が引越して来た晩はそれは賑やかだったと。あたしの弟はまだ生まれる前で、あたしはもう歩けるようになっておりました。おつかさんは物置きの扉を少しだけ開けてその隙間からのぞいたのでございます。おつとさんが男の子を肩車していて、年の頃はあたしと同じくらい。丁という女が抱いていた女の子は小巧^{シヤオチョウシエン}貞^{エン}って呼ばれていて、それから騒ぎに加わって大勢が集まり、外に酒の席を設けていたのでしょう。あた

しのじい様もばあ様も戸口を閉めて出て来やしませんでした。

あたしの家の東に面した小さな出入り口の外は荒野が広がっていて、荒野の先の果ては山まで続いておりました。大舅の家はその山の上にあつて、こちらの家からはそう離れてはいませんでした。おっかさんに弟が生まれると、大舅夫婦がおっかさんの面倒を見によくやつてきて、二爺爺が毎月米や日用品を分けてくれました。弟が乳離れすると、おっかさんは外の荒れ地を耕したり、山で柴を刈ったりして、それで金ができると豚の脂身を買つてラードを作つて缶に詰めるんです。毎日外に出かける前に鍋いっばいに濃い粥を作り、あたしと弟にそれぞれ一椀ずつくれて、それであたしたちは箸の先でちよいっとラードをすくつて粥の中に入れてかき混ぜていると脂が溶けてきます。粥も脂も熱くありませんのでラードの塊はなかなか解けません。それであたしらの食事はずいぶん節約ができるのです。

あたしは四歳になった年の春に、よくわからない病にかかつて危うく死にかけまして、すんでのところで河に投げ込まれて魚の餌になつちまうところでした。あたしらみたいな貧しいところでは子供が死んだら藁にくるんで縄でぐるぐる縛つて河ん中へ放り込むんですよ。もし河に藁の塊が浮かんで、その下に魚がびっしり集まつたら、それは藁の中身を食べているのでございます。

おっかさんが藁をまず横に広げた上にさらに縦にもう一層藁を置いたところに私を置きましてね。物置き扉は西向き、中庭に向かって開いていて、大きな河はうちの西側にあつたので、二重にした藁を包んで縛つて河の中に放り込んだんです。ばあ様が、まだ息があるみたいじゃないか、中庭にそのまま置いてお天道様にさらしてみて、生き返るかどうかやってみようじゃないかと言ったんです。それで昼間おてんとうさまにあてて、夜は藁ごと軒下まで引く張つてきて晒しておりました。そして三日経つたところで、あたしは目を開けたんですよ。このちっぽけな命が拾い

あげられたってわけでございます。

おっとさんの家である時魚を食べましてね、誰かがたくさん送ってよこしたんでしよう、それで急にあたしと弟のことを思い出しまして、魚を食わせてやろうってんで、使いのものにあたしと弟を呼びにやらせたんです。あたしが五歳で、弟が三歳の時です。あたしらはそれぞれ自分の小さな木の椀を持ってきました。「釘³⁹のやつ」(あたしらはけっして丁のやつを呼び名で呼んだことなどなくて、陰で「釘」って言ってたんです)が弟に魚を挟んでやってから、箸で椀を思いつきりつuitたんで、椀が地面に落っこちたんですよ。釘は返す手で弟をひっぱりたいんで、あたしは弟の手を引いて、椀を拾うと身をひるがえしてうちに駆け戻りました。おっとさんが戻って来いと使いのものを来させましたけれど、かんぬきを掛けちゃいましたよ。そしてこちら側から、「魚なんか食うもんか、臭い魚のくそつたれ！」って叫んでやりました。

あたしらの村では昼間はどの家も表門を開けっぱなしにしておりました。あたしは朝早くから外をぶらついて、知り合いの家をすべて見て回るのが、誰かが出てきても知らんふりして、何をきかれても答えんです。目をむくものがいたら、さっと逃げました。だもんだから皆はあたしのことを呆^{ほう}けものって呼んでおりました。おっかさんの身体がだんだんダメになってって、しょっちゅう家にいるようになりまして、ある日、二爺爺の家に行ったら、ちょうどご飯を食べているところで、あたしに肉を一切れ箸に挟んでくれたんです。あたしはそれを口に入れたまま急ぎで家に走り戻り、それを吐き出しておっかさんにあげたんです。おっかさんは肉を何度も舐めてから半分をかみちぎって弟に与え、残りの半分をあたしにくれました。肉を食べたのはこれが初めてです。でも肉の味なんてわからなかったのでございますよ。

おっとさんは村長をやつてましたから、家には旨いもんがたっぷりありました。中庭に縄をわたしてそこに魚やら肉やら鶏やらをいっぱい干してあるのです。釘のやつが我が家にやつて来たその晩、じい様もばあ様も顔合わせには呼ばれませんでした。じい様もばあ様もそれで釘のやつを無視しましてね、向こうもそれで二人を食事に呼ばず、残り物を食べさせましたんです。ばあ様はかまわない人でしたので、残りものがあれば料理する必要がない、ともらったものを食べておりました。じい様は一番の正直もんでしたが、気性が激しくて、しょっちゅう怒っておりました。おこつても腹の中でじつとこらえて表には出さなかったですけれど。ある日わざわざおつかさんとこにやつてきて、魚と肉と鶏をちよつと取つてきてごちそうを作つてくれつて言つたんです。釘のやつは毎朝仕事に出かけるんで、おつかさんは向こうが出口から出ていくのを見計らつて、大きなはさみで鶏の手羽や腿や干し肉を切り取り、それから魚も取つてきて、じい様にごちそうしたんです。ばあ様は残りを食べた後、ちよつど外の部屋で手伝いのおばさんたちとおしゃべりをしておりました。じい様は一人で食事を終えると、縄を一本持ち出し、腰掛を運んできてその上に上がり、縄を梁にひっかけた後それを首にまわしてそれから腰掛を蹴つたんですが、そのまま突つ立った状態になつておりました。

あたしはとても不思議でしたんで、ばあ様を呼んで、じい様が縄にぶら下がつて腰掛を蹴つ飛ばして倒したけど、それなのにまだ立つてる、と伝えたんです。何度も繰り返し同じことを言つたものですから、それで、ばあ様とおしゃべりをしてた一人のおばあさんが、「あんたんとこの呆けものが何かずつとわめいているから見に行つておやりな」というんで、皆がやつて来たのです。それでじい様が西廂房の外の間でぶら下がつてのを見つけて、こりや大変と大騒ぎになつて、すぐに助けを呼んで、じい様を下ろして綱をほどきました。二爺爺もやつてきました。じい様

はすでにこと切れておりました。テーブルにはまだ残った料理が乗っかっておりましたよ。あたしはじい様が首を吊るのを見て、その時はどうして腰掛がなくて立ってられるんだろう、って不思議に思っていたのでございます。

ばあ様が病で倒れました。姉さんはばあ様と一緒に寝るのを嫌がりましたんで、おっかさんがあたしを呼んで一緒に寝るようにと言いつけました。ばあ様は「いい子だね、ばあ様の足を温めておくれ」ってあたしに言います。ばあ様の纏足の両足は氷のように冷たいんです。弟は一人で遊べるほど大きくなってましたから、あたしはよくばあ様にお茶や飯を運んでおりました。ある時などは釘のやつが背を向けたすきに、テーブルの残った料理を大づかみにしてばあ様のところに持っていきました。ばあ様は急いでベッドの頭んところにおいてあった布きれで包んで、ちよつと口にして、エビだね、うまいね、って言って枕元に置いてゆつくりと食べておりました。

ばあ様の腿がだんだん腫れてきて、纏足の脚よりもほど腿の方が太くなっちゃいましたんで、横になるしかできず、ベッドから降りられなくなりました。大便にも小便にもベッドから動けんのです。ばあ様の部屋に大きなおまるがありました、あたしでは動かせません。おまるの丈が高くて、抱えて引きずるようにしてベッドの前の真ん中あたりにおいてから、ばあ様の身体をひねるようにして何とか引つ張って、一本の脚を抱えてあたしの肩に乗せてから、もう一本の脚もう一方の肩に乗せるようにして、それではあ様が自分で前の方にせり出すようにして、おまるに座らせたんです。ばあ様はいつも「いい子だ、このやり方はほんとにいいねえ」と言いました。でもおまるに蓋をしてベッドの前に置くのを、臭いって嫌がりました、胃がひっくり返っちゃうと言いますので、それであたしは何とか力を振り絞っておまるを離れたところに引つ張ってたんです。おまるは本当に大きくて、便や尿がどれだけたまってたんだかわかりませんでしたが、押したり引いたりするのにともかく重いんですが、ひっくり返ることはありません

でした。

ある日、ばあ様が蚊の鳴くような声で「いい子だ、ばあ様の脚を温めておくれ」と言うので、あたしはばあ様の脚を抱いて寝たんですが、どうしてもあつたまらないのです。そのまま寝入っちゃったんですが、目が覚めるとばあ様の脚がいつもよりも冷たいし、それに固く突っ張ってて、ちょっと押すと体全体が動くんです。起き上がってばあ様を呼んだのですが、目が半開きで、くちも半開きのまま応えません。もう仰天して、飛び出して大声で人を呼んだんです。ばあ様が死んじまったって。

おととさんは一日中外で忙しくして夜遅くじやないと帰ってきませんでした。釘の家の方もうまくいっていたわけではございません。あたしと同年で、おととさんの肩に乗ってこの家にやってきた男の子が痘瘡にかかっちゃまいましてね。釘のやつは、痘瘡は治らない、人にもうつっちゃうよ、古いゴザにくるんで担ぎ出して山裾にそのまま埋めといて言っただけです。埋めたもんが胸騒ぎして、三日、四日してから掘り出してみたのでございます。あたしは見に行きませんでしたけど、見たもんだれもが、つやつやてかてかして生きてる人間みたいだったって言っておりました。みなはね、まさか化け物になったんじゃないだろうが、ともかくもう死んじまってるんだから、って言っただけで燃やしたんでございますよ。

あたしより一つ歳が下の小巧貞も病にかかりまして、何の病だかわかりませんが、これも嫌だ、あれも嫌だって食べるのを嫌がって、新鮮な果物が食べたいってぐずりましてね。釘のやつがかつとなつてバシッと平手打ちを食わせたら、あの子の息が止まっちゃったんですよ。釘のやつはね、子供は棺桶に入れるもんじゃない、古い戸棚を棺桶代わりにして扉^{とら}を釘で打つてとめて山の野墓に担いでいき、別の棺桶の横に置いて後で一緒に埋めればいいと言ったの

です。戸棚が担がれて表門から出るとき、あたしは丁度表門の敷居にまたがるように腰かけておりました。あたしは立たずに脇に寄ったんですが、なんだか戸棚の中で小巧貞が動いているような気配がしたのです。でも何も言えませんでした。釘のやつにひっぱたかれるのが怖かったんです。ちよっとしましてから、小巧貞の戸棚がひっくり返ったというじゃありませんか。それで誰かが開けてみてみよう、って言ったので、あたしも後について見に行きました。小巧貞は両足を縮め、手でぎゅっと自分の髪の毛をつかんでおりました。死んでなぞいなかったのは確かでございます。でもそのまま釘のやつに生き埋めにされちゃったんです。おっかさんがため息をついて「自分のお腹を痛めた娘じゃないかい、この丁ってやつは鉄でできてるのかい。お前たち、二人ともあいつの手に落ちていたら命なんてありやしなかったよ」と言ったのございんです。でも釘のやつはまた子供をはらんでおり、腹がずいぶん大きくなっております。

一九五七年の秋でしたが、あたしが九歳になった時、村の堤防が崩れちゃって、つまり、水が上がつてきて、部屋が水浸しになっちゃったんです。大舅の家もございいます。大舅はあたしら三人と、それからたくさん家族を引き連れ、敷物やら被り物やら食べ物やらを持って近くの山に避難しました。でも山には狼がおりまして、夜中にある家の子供が食べられちゃいまして、足一本だけが残されておったんですよ。虎頭靴⑩もついたままでした。皆は慌ててまた別のところに移ったのございいます。大舅はおっかさんに村に戻ったほうがいいと申しまして、というのもおっさんとさんが校長だった小学校が村の北側、一キロほど行ったところにあります、小高くなっていましたので水はそこまですで上がっていませんでした。大舅はおっさんとさんにとりなして、あたしら一家三人が食堂の脇の物置き小屋に寝泊まりして自分らで食い扶持を探せるようにしたのです。あたしらはそれで食堂の残飯でしのいだのございいます。食堂で

食べるのならば食費を払わなければなりませんでしたから。

あたしは子供たちが授業に出るのを見て羨ましくなりませんでした。姉さんは釘のやつを自分の母親とみなして、「おっかさん」とも呼んでまして、あたしはそれで姉を恥知らずもの、おっかさんのお乳で育ったくせに、釘のやつをおっかさんと呼ぶなんて、と咎め^{とがめ}たものです。でもあの人はずっと学校に通ったんですよ。小学校も卒業しました。あたしはずっと教室にちよつと座るだけでもいいから座ってみたいと思っておりました。でも学校には上げてもらえませんでした。おっかさんに「おつとさんの戦友に引き取ってもらってたら、あたしだって小学校に上げてもらえたのに」と訴えたところ、おっかさんは「秀秀、覚えておくんだよ、女の運命なんてのは芥子^{ケシ}粒ほどのちっぽけなものだつてことをね。お前が町に行ったら間違ひなく死んでたさ、今日まで生き延びられてるはずはないんだよ」と答えたのでございます。

あたしには従兄^{ニウサイズ}がいて、牛仔子^{ニウサイズ}という名でしたけれど、おつとさんに気にいられてましてね、へつらうのだけはうまかつたんですよ、そいつがよく家に来ておりました。学校で働いていたんです。ある時食堂で包子^{パオズ}が出ました。包子なんて見たのは初めてでした。牛仔子が蒸籠^{せいろう}の前に立って包子を食べてるんです。あたしは壁沿いにじりじりと寄っていきまして、見たかつたんですよ、一目ね。口に入らなくても、ちよつと見ることでできれば空腹しのぎになりますから。でもこの牛仔子はほんとのろくでなしでございます。やつは包子を一つあたしの目の前で振りかざして、にやにや笑いまして「お前も食いたいんか？ ふん！」こう言つて自分で食べちまつたんです。あたしはもうかつとなつて身をひるがえして駆け出しましたよ。おっかさんが「そこで待つてなさい、おつとさんが食べさせてくれるから」と言つたんですが、あたしは言いましたよ。「かあさん、おつとさんとは目を合わせたこともない、道で出会っ

たら横道にかけこむか、そうでなきゃ来た道をかけもどるよ」あたしは父が憎かったんでございます。大きくなつてからおつかさんにおつとさんのことを恨まないかと尋ねたら、おつかさんはため息ついてこう申したんですよ。」ともかくあの人はお前たちの父親じゃないか」つてね。おつかさんは恨んでおりませんでした。

餓死者が出た時⁽⁴⁾あたしは十歳でした。たくさんものが暗くなると田に行つて粃を盗むんです。あたしはおつかさんの使つてない枕カバーをもつて後についていきました。体が小さかったんで、田んぼの中じゃちやうど誰にも見られなかったんでございます。こうやつて一緒に盗みをしました。お偉方の中には袖を縫い合わせて二つの袖にぎつり詰め込んでおりました。彼らが背を向けたときに、その袖から粃をおおづかみに盗みとつて枕カバーに詰め、一杯になると重くて持ち上げられませんので、家まで引きずつて行つたんでございます。平たい大きな石と小さな石を見つけてきて、粃を一つかみ一つかみと挽きまして、もみ殻を除いたあとおつかさんが水っぽい薄い粥を作ってくれました。当時の家でも煙突から煙を出すことはまかりならんことでした。うちの煙突は荒地地のほうを向いていましたし、低かったので、夜中に煙を出しても誰も気づきませんでした。おつとさんも氣にかけて、毎日姉さんに一、二枚の乾餅⁽⁵⁾を持たせてよこしました。姉さんはあたしに盗みをやらせようとして、盗みをやらなければ乾餅をくれないのでございます。もし一日粃を挽かなければうちで食べられる粥がなくなっちゃいます。おつかさんは薄い粥を自分とあたしの枕に入れ、濃い部分を弟にやりました。ある時などは本当に危ういところでした。粃でいっぱい枕カバーをひきずつて家に戻る途中、見回り隊に出くわしてしまつたんでございます。あたしは袋の上に覆いかぶさり倒れたふりをしました。見回りの者たちはちらりとも目をやりませんでした。あたしが餓死した子供だと思つたに違ひありません。誰にも蹴つ飛ばされませんでしたし、踏まれもしなかったのでございます。二舅は餓死しました。あ

のうちには自分で餌を見つけていた鶏がおりまして、二舅はその鶏のスープを食べたのですが、二舅の妻が惜しがって鶏を屠れず、それで二舅は飢え死にしたのでございます。

あたしも労働点数を稼ぎましたよ。でもいつも姉さんにいじめられました。水を載せたりヤカーを引くときは、重いほうを支えるように言われて、姉さんは軽いほうを支えるのでございます。あたしが十三歳で、弟が十一歳の時は、人様の牛の面倒を見て、一年間で八十点の稼ぎです。家には労働力がないので、だれかが仲人になって姉さんに相手を見つけてきて、床屋をやってる人を見合わせました。床屋はとても稼ぎがよかったです。その人はあたしらの村の者ではございませんでした。なかなかの男前で姉さんは結婚を望んでおりました。婿養子、婿入りでして、うちの仕事を手伝ってくれるんですから結納はいりません。ところが結婚してわずか一年で姉さんと二人で一緒に逃げちゃいました。あたしのおつかさんは四十七歳で浮腫を患いまして働けなくなりました。あたしは当時十四歳、一番下の一等労働者にすぎなくて、もらえる労働点数は八点と半分なのでございます。鶏の糞拾いをしては点数を稼ぎ、鶏を飼って卵を売るなどとして稼ぎました。うちの表門の前にクチナシの木がありまして、花が咲くとしっかりと大きいんで、あたしは毎朝早くに花を摘んで、河を渡って市に売りに行きました。たとえ稼ぎが少なくても早く売れることが大切で、花一つが一銭、売り終わったらうちにもどって労働点数を稼ぐんでございます。

堤防の西側には菱池がありました。茂っていたのは野生の菱で、たくさんの実をつけていました。池は大きくはありませんが、ところどころ大変深くなっております。岸近くの菱はもう誰かに採られてしまっておりまして。あたしはひとりこっそり行つてたくさん菱を採ろうと思ったんでございます。売ってお金にもなりますし。それで木製のたらいを頭に被つて池に行きました。たらいはたいして大きくはありませんが、あたしは体が小さかったもので十分な

大きさです。たくさん菱を摘むとそれをたらいに山盛りにして、手で漕ぎながら採っていました。その年は残暑が厳しく蒸し暑いなと思ったらいきなり風がふわっと吹いてきて、あたり一面が黒雲に覆われたのでございます。そして黒雲が強風と大粒の雨を運んできました。横殴りの風に、斜めから吹きつける雨はそれはそれは大粒で、あたしのたらいは水浸しになっちまいました。岸に向かって漕ぎ出した時、ものすごい突風が起こりあたしをたらいごとひっくり返したのでございます。幸運にもたらいは水面にかぶさる様にひっくり返りましたんで沈むことはありませんでした。あたしは手でたらいの縁を押さえ、もう一方の手で水面の菱の葉をつかんで岸に向かって進みました。もし菱池に落ちましたら、野生の菱の枝や葉が絡まりあっておりますからはまって上がって来られません。二年前にあたしの遊び相手だった小五シヤオウが菱池に落ちて死んでしまいました。今度は小五があたしを呼びに来たんだ、って思ったものです。幸運にも沈まず、強風は岸に向かって吹いてましたんで、すぐに岸辺にたどり着きました。水から上がったあたしはまるで水に落ちた幽鬼でございます。摘み取った菱はみんな無くしてしまい、たらいを頭にかついでびしょ濡れになって帰ったのでございます。おっかさんはあたしが菱採りに行ったのを知ってまして、座ったまま呆然としておりました。あたしが戻ったのを見て、安心して「戻ってきたかい、戻ってこないんじゃないかと心配してたんだよ」と言いました。おっかさんはこういう「ぼんやり」ものなんです。あたしを探しに飛んできたり、何か助ける方法を考えたりもできませんで、ただ馬鹿みたいに座ってぼんやりしているのでございますよ。

納める穀物を担いだ大人の後からあたしも穀物を担いで堤防の土手の上を歩きました。彼らが草履をはいているのを見て、見よう見まねで草履を編みました。まず先端から底へと編み上げていき、最後に鼻緒。足につければ軽々と歩けます。あたしは自分で小さな天秤を作りまして、毎日大人の後を土手を歩いて穀物を届けたのでございます。と

ころが年の瀬に決済が来るとあたしの家はまったく点数が足りませんでした。ほんの十四歳でしたから、一家三人の口をあたし一人で養うなんて土台無理なのでございますよ。公社の入りに口に立って声をあげて泣いておりますと、そばにいた人が見ていられなくなって、姉さんにも分担させるべきだと言って、そして姉さんに分担させたのです。二、三年後にあたしが豚を飼って金を稼ぐと、姉さんは借りた金をきれいに返すよう迫ったんです。びた一文まけてくれませんでした。

公社には文工団⁽⁴⁾ができて、黄梅劇⁽⁴⁵⁾をやっても点数を稼げました。あたしは飲み込みが早く劇を覚えながら文字も覚えたのでございます。声がよかったし、舞台化粧映えもして、しぐさもなかなかのものでしたから、主役ばかりやりました。初めて舞台に立った時は目の前に黒山の人ばかりでびくびくしたのですが、台の下からいざと掛け声がかかって、それで却って肝が据わったのでございます。それから舞台に上がると、まず下に目を走らせると、下からいざと声がかかるようになりました。あたしの歌は大人気でした、芝居が終わると皆が口々に「この子は鄧家の呆けものだよ、飢え死にせず済んだんかい。全く女十八変化（へんげ）⁽⁴⁶⁾とはよく言ったもんだ」と話しているのです。あたしの大きな目は父親似だという者もありました。おっとさんは大きな目をしてまして、男前でしたが、でもあたしはおっとさんになぞ似たくありませんでした。おっかさんはあたしが芝居をやるのをついぞ見に来ませんでした。でも芝居は労働点数が高かったもので、暮らしはぐんと楽になったのでございます。

そして一九六六年の「文化大革命」⁽⁴⁷⁾です。おっとさんは黒帮⁽⁴⁸⁾と相成っちゃいました。あの牛仔子めが、やつは腹心だったのですが、はつきり一線を画そうとして、おっとさんについてあることないこと仰山言ったのです。釘のやつはですが、もともと嫁ぎ先があつたが、花嫁駕籠が迎えに来たとき、逃げ出してゲリラに加わっていたのです。これ

がおつとさんの大罪になりまして、皆が大いに憤りまして、おつとさんはそのまま殴り殺されてしまったのでございます。釘のやつの方はもう一人娘を生んだところでしたが、一緒につるし上げられました。でもお相伴程度のものでございます。

あたしらは黄梅劇をやめて革命模範劇⁽⁴⁹⁾をやるようになりました。あたしはやはり主役をやったんでございます。かなりたくさん文字が読めるようになっておりました。歌のひとくさりを写すんで書けるようにもなりました。ですが、おっかさんが案じまして「お前のおつとさんは逝ってしまったからもうあの人のことでくよくよすることはなくなつたよ。ただおまえだよ。芸人は、死んだらさまよい⁽⁵⁰⁾霊になつちまうんだよ」と申すんでございます。「さまよい霊」がどういふものかあたしも知りませんでした。おっかさんには、案ずることはない、金を稼いで皆を養つてるだけなんだから。点数が稼げるんだつたら芝居はやらないから、と申したのでございます。おっかさんは、旦那さんを見てやるから、ちゃんと嫁いでくれれば、おっかさんも安心だというので、あたしは、わかりました、おっかさんがふさわしい人を見つけてくれればその人に嫁いで芝居はやめます、つて答えたのでございます。

その年の冬、あたしが女の連れと日向ぼっこしておりまして、それぞれ飯碗を抱えておしゃべりに興じておりましたところ、急に爆竹が二度ほど鳴りました。「誰かの家で嫁を迎えたんだ、見に行こう！」と見に行つてみたところ、他でもないあたしの家でした。門を入ると、大舅と二人の客が去つたところでした。おっかさんが縁談を決めたんでございました。相手の姓は李で大舅の村のもんでした。取り持ったのは大舅で、話では李家は少しばかり貧しいが、ふた親はおらず、もっぱら他家の手伝い人として働いている。人は誠実で、背も高くがっしりして大変丈夫である。顔も愛嬌があつて、おっかさんは大変気に入つたとのことでした。結納の品はいくつもありませんで、テーブルの上に

全部乗っかっておりました。

大舅のおかみさんも飢え死にしておりました。大舅は裁縫屋でして、仕事はそれほど大変ではなかったので飢え死にせずに済みましたが、でも病を得まして、目がほとんど見えなくなりまして、もう裁縫の仕事ができなくなつたんでございます。大舅は読み書きができて帳簿を付けることができましたんで、商人の手伝いあきんどをしてなかなかの生活をしておりました。片割れがいなくなつたんで、それで一人奪つてきておりました。あたしらの村は寡婦の略奪婚が行われていたんです。大舅には腕つぶしの強い仲間たちがおりました、若後家が一人、働きもんで器量もなかなかいいのがあるって聞いて、墓参りしているときを狙つて捕まえてぐるぐる巻きにして大舅のところに届けてきたのでございます。この後家は三日三晩泣きわめいて、罵るのも罵り疲れて、腹もすいてたまりませんで、それで大舅に嫁いだんでございます。あたしらの村では結婚は最初の時は親が決める、けれど、二度目からは本人が決めることになつていて、これを略奪婚の言い分にしておりました。ところがなんとこの舅妈【大舅の妻】の罵り方が本当にすごくて、機関銃のようでした。それであたしらは機関銃って呼びました。ほかの点では申し分なかったのですが、ともかくひどい罵りようでした。でもあたしらの家のことは全く口出しはしませんでした。

あたしらは結婚前に顔合わせもしました。あたしはあの人のことを李兄兄さんと呼んで、あの人はあたしを秀秀と呼びました。あたしらは縁があつたのでございます。李兄さんは大舅の家の一室を借りてまして、それであたしがそこに越してって嫁になつたのでございます。ところがなんと機関銃が部屋を貸すのを嫌がつて、毎日のように機関銃の掃射を受けたもんですから、もうたまらず、一か月も経たないうちに実家に戻ってきてしまいました。

「おつかさん、家には二間あるね、北の小さいほうはおつかさんが使うことにしたらいい。弟はもう姉さんがいる

あっちの家に移つてゐる。物置きに続いてる廂房は大きいから、李兄さんに貸し出しなよ。あたしら契約書を書いて、月ごとに家賃を払うから。近くに住んでいればちゃんと面倒を見ることができて、おっかさんのことを心配せずともすむから」おっかさんにこう言いますと、おっかさんは「何言つてんだよ。お前たちが戻つてきたらうれいなんてもんじゃない、何が家賃だよ、早く帰つておいで」つて答えたのです。李兄さんはそれでも借用書を書きました。こうしてあたしらはおっかさんと一緒に住むことになったのでございます。嫁入り道具なんてありませんでしたから、実家に戻るのとはとても簡単でございます。あたしらはおっかさんと水入らずで暮らしまして、仲睦まじくして、節約もできましたんで、今から見ると、この生涯あの時の数年間が一番幸せで、心温まる和やかな日々でございました。当時の数年間を思い返しますと、辛くてたまらなくなります。

老李【李兄さんのこと】は孝行ものでした。ほかのものと関係もとても良くて、二爺爺にも二奶奶にも気に入られておりました。あたしの弟は遊び好きでして、自分の分の土地は老李に耕してもらつてました。釘のやつですら老李のご機嫌を取つておりました、釘はまだ嫁いでいなかったんです。三奶奶の息子は入隊して解放軍兵士になり、娘たちの方もみな解放軍に嫁ぎまして、三奶奶は一人で暮らしてましたんで老李が手伝ってくれるのをやはり喜んでおりました。

あたしは続けざまに息子と娘に恵まれまして、大きいほうは大宝^{ダイ宝}、小さいほうは小妹^{シヤ妹}と申します。それから避妊手術をして生むのはやめました。あたしらはずっと西廂の二間に住んでおりましたが、家族の人数が増えましたんで、表の入り口前で野菜を植え、豚や鶏の飼育も始めましたが、油や塩、味噌醬油に酢それにお茶といった生活に必要なもんすべてにお金がかかります。一家は腹を満たすだけでなく、服も着なくちゃなりませんで、子供から大人までの

靴にしても、靴底を縫うだけでもおっかさんは大忙しです。一家五人の服や布団も、二人の子供は日に日に大きくなりますから、靴下ズボンも新しいもんが必要ですよ。綿入れの上着やズボン、表布や裏布、中に詰める綿、どれにもお金がかかります。大人は古い服で間に合わせられますけれど、子供は素っ裸でいるわけにはいきませんし。真冬に素足をさらしてズボンなしたたのはあたしだけで十分、あたしは誰からも気にかけてもらえない小娘でしたから。でもあたしらの小妹はみんなから可愛がられて、大宝よりも可愛かったんでございます。でもお金をどうしたらいいんでしょう。あたしらは毎日どうやってお金を稼いだらいいかそればかりを考えておりました。

老李は耶蘇信者でした。一番古いほうのです。新教とか旧教とかあたしにはさっぱりわかりませんが、とにかく老李が信じる神様をあたしも一緒に信じたんです。それで同じ信者の友人が何人かできました。呉姐ワイジエという人が北京からよくやってきおりました、北京では臨時雇いの稼ぎがよいということを申しまして、ただ男は仕事にありつくのはむづかしくて、女ほどには見つけれられない、一か月に二十元は稼げるということでした。でも北京はととてもとても遠いもんですから、どうやって職探しに行ったらいいもんでしょうか。

一九七二年、呉姐が言うには、北京の乾媽ガズマから仕事を頼まれ、何人かお手伝いさんも見つけなくちゃいけないということでした。すでに王姐ワンジエという人を頼んだけれど、あたしにも行かないかということでございます。あたしは毎日のようにどうやってお金を稼いだらいいかを考えておりましたから、彼女と一緒に北京に職探しに行くことに決めました。この年二十二歳でして、小妹はもう断乳しておりました。姉さんに金を借りて列車の切符を買い、中秋節を迎えた後の八月十八日に、三人で集まって一緒に汽車に乗りましたんでございます。老李はあたしの一年分の服の包みを持って駅まで見送りに来ました。そして入場券を買って、あたし三人が乗り込むを見届けてもその場

に立ったまま発車を待つておりまして、汽車が動き出してもまだそこで手を振っていたのでございます。こうしてあたしは老李を別れを告げたのです。

とても苦しいございました。そのまま飛び降りて老李と一緒に帰ってしまおうかと思つたほどです。心臓は問題ありませんでしたから、心臓の痛みではないとは頭でわかつておりましてもキリキリと本当に痛みましたのでございます。丸一昼夜の旅でして、朝食をとってから乗り込み、翌日の朝早く、北京に着きました。あたしは王姐と一緒に呉姐が乾媽のために持つてきた大小の包みを手にして一緒に駅を出まして、バスに乗つて西四^{シーフォー}まで行つて下車するとほんの数歩で東斜街に着きました。

乾媽はちようど朝食をとつておりました。王姐が土産として持つてきた干し柿、蜜柑の砂糖漬けを渡します。うまい具合にあたしも徹夜で布靴の底を縫いましたんで、急いで包みから出して渡しました。心ばかりの品だと申しまして。乾媽は意外にもこれをととても喜んで、表と裏と何度もひっくり返しては出来栄えを丁寧に見て、とても器用だとはめてくれたのです。そして使用人の部屋で食事をとらせてくれました。乾媽はこの家の大家でした。彼女と呉姐が口を開けば馬參謀^{マサンボウ}長の名を出すので、おそらくその方が手伝いが必要としていたのでしょう。乾媽は呉姐と少し話していました、そのままあたしらを置いて用を足しに行つてしまいました。呉姐が言いました。「乾媽がもう少ししたら馬參謀長に電話して、食後にあたしら数人で手伝いを欲している家を何軒か回つて、相手方にふさわしい人を選んでもらうよう手筈を整えてもらいます。馬參謀長はとてもお忙しい方だから、時間を約束したら一分だつてむだにはできないのですよ。あのお方は東城^{トウシヨウ}に住んでおいでだから、あたしらまずは先に東城に行きましょう。あんたらは村で教導員しか会つたことがないでしょうから、東交民巷の天主堂^{トウシヨウ}の徐神父様に会いに行つて、お御堂も見ましょう。

それから乾媽のかわりにその付近でごちそうするから。馬參謀長のお宅はそのすぐ近くですから。あと自分の荷物を持っていくのを忘れないようにと乾媽から注意がきてますよ」。

徐神父はすでにミサを済ませ、ちょうど教会の前の階段の上に立つておられました。とても和やかな方で、洗礼を受けたかどうかをお尋ねになりました。あたしらは二人ともまだ受けておりませんでした。徐神父はお御堂にあたしらを招き入れましたんで、あたしも神父様に倣って聖水をちよっと指につけて上下左右と十字架を切って跪きました。そのあと神父様の後についてお御堂の裏の小さな部屋に行きました。徐神父様は「道」について少しお話になりましたが、それは、あたしらの祖先が罪を犯したから、この世に生まれたあたしらは苦しんで罪の贖いをしなければならぬといったことでしたが、その他のことはよくわかりませんでした。徐神父様はあたしに十字架を一つ、ご自身が首にかけておられるのとまったく同じものと、それから一冊の冊子をくださいました。そこには主の祈り、聖母マリアの祈り、信仰宣言、それからモーゼの十戒がありましてございます。王姐は字が読めませんでしたので十字架だけをもらいました。徐神父様はわざわざあたしらのためにこう仰りました。「あなたたちは手伝いの仕事なので安息日を守ることができませんね。主を信じるには主に心が誠実であることが大切です。毎日お祈りを忘れないように。お祈りをするときは、神はあなた方のすぐ前におられます。ミサに出るのが大変だったら無理をしなくてもよろしい。日曜日いつも通りに働かないといけないでしょうから」。こう仰ってから、一人ずつ祝福してくださいました。祝福を受けてあたしは老李と一体になったような気がして、なんだか落ち着いて、心も温まり痛みも忘れたのでございます。

あたしらは約束の時間きっかりに馬參謀長のところに参りました。馬參謀長はとてもの立派でしたが、慎み深く、

無駄話一つせずすぐにあたしら三人をご自身の車に乗せると、ご自分は運転手の横にお座りになりました。呉姐はあたしと王姐にこう言いました。

「このご時世、これまでとは様変わり、お手伝いを雇おうなんて家がどこにありますか。幹校(57)に行く者は幹校に行っちまってるし、山地や農村に下放するものは下放して、お手伝いが必要なのは高官の家だけ。あの人たちはる安徽省まで探しに行くんですよ。あちこちで雇い主の家の事情を触れ回ってほしくないのね。あんたがた、よく覚えといて下さいよ。雇い主のことは外で話したりしてはだめですよ。尋ねるのもだめです。自分の仕事だけをしっかりとやっておくれなさいな。それほど大変な仕事ではないし、給料だって悪いことはないはずだからね」。

あたしたちはまずは趙家に行きまして、先方はあたしを選びました。給料は毎月二十五元、毎年半月の休暇をもらえることをはっきりと説明されました。仕事は一家七人の身の回りをきれいにすることでした。馬參謀長が引き受けるかねとお聞きになりました。二十五元の給料なんて思いのほかでございます。あたしは急いで領きながら喜んでと答え、馬參謀長にお礼を申し上げまして、それで彼らはあたしをそこに降ろして別の家に行きました。何さん

あたしを選んだのはこの家の奶奶【大奥様】と姑姑(58)【奥様】それから奶奶にお仕えしている何さん(59)でした。何さんがあたしを彼女の小部屋に連れていき、親切に仕事を教えてくれ、それからこの家の人々についても話してくれました。奶奶は高級幹部の娘でして、趙姓ではありません。趙という姓は婿さんで、姑姑の旦那さんです。このお二人は仕事を持っていましたが、姑姑は病気で休みをもらい、仕事は半日だけです。姑姑がこの家を切りもりしております。大姐(60)【姑姑の長女】、二哥(61)【長男、二番目の子供】、三妹(62)【次女、三番目の子供】、四妹(63)【名目上は三女】はみな学校に通っています。夕食の時間にお目通りすること。守衛、運転手、料理人がおり、あたしの仕事は洗濯と家の

掃除でございました。洗濯機はありましたが、大きなもの以外の小物はたらいに一緒につけてはならず、分けなければなりません。男物、女物、上着、下着、シヨーツ、ハンカチ、靴下それぞれは一緒に洗ってはならず、すべて手洗いをして、シャツはアイロンがけが必要でございました。それぞれの部屋を見せてもらったあと、食堂に行き、昼飯、夕飯は何時に食べるのかを教えてくださいました。食堂をきれいにするのはあたしの仕事、食器洗いはあたしの仕事ではないこと。奶奶の三つの部屋は何さんの担当、奶奶に呼ばれない時は入らないこと、お客様がいる場合は自分でよく気を付けて近づかないようにとのこと。それから洗濯と物干しする場所を見せてもらい、絹物は日に当ててはいけないのだと言われました。その後私の寝場所に案内され、わきに挟んでいた服の包みを下ろすように言われました。何さんはベッドの前の腰掛に腰を下ろし、あたしにも座るように言うのと、ほんと息を吐いてから「李さん、あたしもあんたを気に入ったんだ、どうか長くいておくれ」と一息に言うもんですから、あたしはとほけて「長くないってことがあるのですか?」ときいてみました。すると何さんは笑みを浮かべながら答えました。「それぞれ氣質が違つてね、慣れてくれればわかるよ。四妹は三妹と同年で月も一緒、姑姑が生んだんじゃないって、母親は亡くなっている。小四妹は奶奶の宝物だから小四妹が泣きでもしたら、姑姑が文句つけにくるからね。おわかりかい?」そのあと、まず少し休んだら夕食前に急いであの汚れ物の山を洗っておくれ、もう丸二日誰も手を付けてないんだからと言ったのでございます。つまり前のお手伝いさんが辞めてから二日経っていたということです。

あたしの寝場所はそのなりに広いのですが、暗くて全く光が当たりません。部屋の前の大木が遮っているのです。少し怖くなったので、徐神父からいただいた十字架をベッドの前にかけて、心を落ち着かせました。そして暇を盗んで老李に手紙を書きました。封筒はあの人が開けやすいようにして、切手もはって、便箋もきちんと折って封筒の中

に入れたのでございます。夕食前に何さんが、呉姐さんたちも皆仕事が見つかったこと、給料は二十二円でなかなかいいということを教えてもらいました。呉姐さんは彼女の電話番号を覚えてくれました。

ようやくのことで最初の月の給料をもらい、二十元を送り五元を手元に置いて必要なものを買うのに当てました。この一年の本当に長かったこと、いつも家に帰る夢を見ておりました。夢の中で夢だとわかり、腕をつねったら目が覚めるのですが、目が覚めると後悔しまして、でも夢にはもう戻れないのでございます。それでも老李が手紙をよこして、暮らしが楽になった、心配しなくてよい、汽車の切符代はもう返したから、大宝も小妹も冬の綿入れの上下を新調したからと言ってよこしたのが何よりでございました。

ひと月またひと月とひたすら給料を待ち望んでおりました。家に必要なお金を送ると数日間は気が楽になるのでございます。姑姑があたしの十字架を目にとめて気遣い下さり、西城にも教会があるから日曜日に行ってもよいとおっしゃりました。二回ほど行ったのですが、神父がお話になる「道」が理解できなくて行くのをやめました。二年目の中秋節を過ぎた時、あたしには半月の休暇がありました、呉姐さんにはありませんでした。それであたし一人で家に戻ったのです。老李が迎えにきましたが、あの人、ぐんと年を取り、痩せもして、体中から酒の匂いをさせておりました。なんでも眠れないので、酒を飲んでようやく寝につくって言うんです。実際一番安くて強いのを飲んでおりました。あたしはもう心が痛んで出稼ぎをやめたくまりましたが、毎月の二十五元はどうしても必要なのでございます。この一年、我が家はなんとか凌ぐことができましたのでございますから。

この最初の休暇ですが、それでもあたしにとって一番楽しい休暇でした。家のことを言い出せば腹立たしいことばかりでしたが、弟のためにいい縁談を取り持ってやったのに姉さんが破談にしまつて、相手が背が低くて、背が高

い弟と釣り合わないと申してでございます。姉は別に派手な女を見つけてきたのですが、軽薄な女だったようです。あたしがうちにいませんので、おつかさんは姉さんの言いなりなのでした。二人が弟の婚礼を取り仕切っていたのです。新婚夫婦の部屋は姉さんが前に住んでいた部屋でございます。釘のやつは娘二人を連れて家を出ておりましたが、正房はまだそのままだっておりました。

二度目も中秋節が過ぎてから戻りましたが、老李はやはりよくなっているようには見え、びっこをひいており、酒を飲んで寝て体を冷やしたということは何の病かわからないのです。文工団の仲間に出くわしまして、皆から戻っておいでよと言われました。ですがおつかさんはあたしが流れ者になっちゃうのを心配しておりまして、郷里では芝居芸人の中にはたしかに評判の悪いものが何人かおりましたから。老李のために出稼ぎに行かないわけにはいきません。ひと月に二十五元の稼ぎですよ。この年は特別に祝い金も出しました。あたしは老李に酒を飲むならちよつといいものを飲むように、病気ならば医者に診てもらうようにと言ったのでございます。

あたしの弟は小さいころから遊び好きでしたが、大きくなったら賭博をはじめまして、八割は勝つのです。家庭を持ったあと、若い二人は取っ組み合いをやって、そしたらその派手な娘は出て行っちゃって二度と戻りませんでした。弟はそのままばくち打ちのごろつきになっちゃったんです。私は弟に言いましたよ。あたしは十歳で米を盗み豆を盗みしてお前を養った、あたしが十四歳の時お前は牛を見てるだけで、あたしが一人で労働点数を稼いでお前とおつかさんを養ったんだよ。賭博は勝つこともあるし負けることもある、勝って負けられなくなったところでやめなさいと。弟は金を儲けて有頂天になっていた時でしたから、あたしの言うことなんて聞く耳を持ちません。今回北京に戻ってくるのは本当に心が引き裂かれる思いでした。この一年は二年間よりもっと長く感じられました。夏至の頃、老李

から手紙が来まして、家でまた騒ぎが起こったと言ってきました。床屋をやっている姉の夫がまた逃げ出してしまったと。姉さんと三人の息子を残して、さらにふた月の家賃も未払いのままです。床屋は家具もみんな持つていつちまって、頭をそる客が座る高い椅子と、持ち運びできないものだけしか置いてなかったのです。姉さんはやり手でしたから、床屋の店をもう一人の床屋に売り払い、借金をきれいに返すと、息子三人を連れて実家に戻ってきました。自分では北京に働きに出ることも考えているのございます。三人の息子は畑を手伝いますし、床屋は入り婿でしたので、子供たちの姓はあたしらの家の姓、鄧です、おっかさんは我が家に内孫ができた大喜びでございました。

三度目に家に戻るとき、趙家では中秋節を家で過ごせるようにしてくれまして、あたしはわざわざ老李に良い酒を買いました。でも老李が手紙をよこして、酒はもうやめた、身体もしゃんとしている、病も癒えたと言ってきたのです。それで酒は二爺爺に送ろうと思いました。趙家は中秋の祝い金をくれてその上二日繰り上げて休みをくれまして、それを老李に知らせる間がなかったものですから、まあうれしい驚きにしておこうと思ひまして、幸い迎えに来てもらわなくても道は熟知しておりますので。

うれしくてワクワクしながら家に帰りましたところ、家の裏門にかんぬきがかかっておりました。あたしらのところでは日中のかんぬきを掛けない習わしになっておりましたから、さてはちよっとお金ができたんで老李は用心深くなったのだ、と思いました。それでうちの表門からそつと入り、おっかさんの物置き部屋から部屋に入りましたらなんと老李が女を抱いて布団にくるまってるじゃありませんか！あの人はあたしに気が付きました。おっかさんの部屋の戸は鍵が掛かっていません。あたしは手にしたものをテーブルの上に置くとおっかさんの部屋に入り、ベッドの

前に立ってはららと涙をこぼしておりました。両手で胸をぎゅっと抱え声が漏れないように、幾度となく涙を飲み込んだのでした。おっかさんはぐっすり眠っており、あたしがたたずんでいても目を覚ましません。廂房の裏の扉が開いて誰かが出ていくのが耳に入りました。涙でぬれた目をあげると老李が部屋の入り口に跪いております。あの人も目にいっぱい涙をためておりました。おっかさんを起こしたくなかったので、手であの人に立ち上がるように合図をしました。あたしはテーブルの横で腰掛に座り、老李はバカのように突っ立っております。あたしがベッドを指さすとうやく座りました。むっとする酒臭さもなく、健康的で顔色も悪くありません。あたしはため息をついたつきり言葉がありませんでした。あの人もおっかさんが起きだすのを恐れて、小声でそっと「秀秀、あんたはいい女だ、でも男の苦しみが分かってない」と言ったのです。涙があとからあとから流れてきました。が、しゃくりあげることができません。涙をのみ込みながらあたしは答えました「老李、あたしが悪かったのです」老李は両手を合わせ私を拝むようにして、やはり小声で「秀秀、すまない、俺が罪を犯した」と言いました。あの人は私を引き寄せようとしましたが、あたしはさっと身を離しました。本当はあの人と頭を抱き合って大声で泣きたかったのです。けれども、あたしは、他の点ではおっかさんに似ていなくても、潔癖症のところだけは似ておりまして、あの人が穢れた感じがして二度と触れて欲しくなかったのです。「あの女は誰なの？」と私は尋ねました。「癱子（タンズ）【身体麻痺、ここではそれ呼び名になっている】のかみさんだ。俺のおっかさんに金があるのを知ってよく金を借りに来てたんだ。あいつが俺を唆して、それで俺は罪を犯しちゃったんだ」癱子は炭鉱夫でございまして、腰を押しつぶされたのが死なずに済んで、ベッドでかれこれ二年以上も過ごしていました。これはあたしも知っております。「あんたのことは責めないよ、あの女も。でもあたしらは、今後は……」あたしはこういって、右手の側面で左の手のひらをと

んとんと切る仕草をしたのでございます。縁を切るという意味でございます。「秀秀、許してはくれないのかい」とあの人がいきました。「許さないわけじゃないけれど、でもね……」あたしはこう申しましてもう一度右手で左手の手のひらを何度も切る仕草をしたのでございます。老李は目に涙をためて言いました。「秀秀、俺たちは睦まじくやってきた夫婦じゃないか、一度として顔を赤くして、怒鳴り合うこともなかっただろう、俺のこの一度の過ちを許してくれないか」あたしは答えて「今回のことだけじゃなくて、今後のこともあるでしょう。でもあたしは……」と言ったのですがまた涙が出てきまして、ただ首を横に振るばかりでございました。老李はもう一度跪いてあたしをかき抱こうとしましたが、あたしはさつと身を引いて外へと飛び出したのでございます。あの人は戸口まで追いかけてきて、「秀秀、心が鉄になっちゃったんかい」と言います。あたしは言いました。「李兄さん、あたしの心は生身の肉でできてよ。どうしてあんなのことを責められるかい。どうかこれまで通りおつかさんに孝行してくださいよ。あたしらの大宝と小妹は粗末に扱わないようにしておくれなさいな、あたしらはまだ夫婦だから、あたしはこれからこれまで通り毎月二十元ずつ送金するから——ただ一つ尋ねるけど、あんなは癱子の一家を養えるのかい？」。老李は「向こうは癱子一人だけだ、補償金がある。あいつは金のためじゃないんだ。金を借りるふりをして俺を唆しに来たんだ。俺は誘惑に逆らえずに罪を犯したんだ。秀秀、俺は罪びとだ、でも教導員に告白する勇氣がなくて、皆に知れちまうのが怖いんだ。でも良心がちくちくしてたまらないんだ、祈ることもできない」と申すものですから、「老李、北京に着いたらあんなの代わりに神父様に懺悔をしておくから。でもあんなは毎日祈らなきゃだめだよ」と答えたのでございます。あたしは表面は冷静に繕っておりまして、とても和やかにしておりまして。そして二人で話し合ってしまったのです。けれどもあたしの心はもう張り裂けんばかりでした。あたしは顔を洗い、おつかさんを起こしました。

お金を老李にわたし、それから持参したものを一つずつあとで皆に分け与えるように頼みました。高価な酒は二爺爺に送りました。その年、小妹は四歳で、大宝が六歳でございまして、ちょうどあたしの弟と遊んでおりましたので、二人を呼び寄せて、接吻して抱きしめてやつてから、食べるもの、遊ぶものをそっくり二人にやったのでございます。北京の雇い主から急用で呼ばれたので今晚汽車の切符を買って北京に戻らないといけなくなったと言いつきました。中秋節は帰省する切符は買うのが難しゅうございますが、故郷から北京へ向かう汽車の切符は簡単に手に入ります。特別快速の切符を買いましたので、中秋節の午後には北京に着きました。

趙家には戻ることはできません。どの面下げて戻れるというのでしょうか。中秋節は家族団欒の時でございます。そこに飛び出してゆくものなど誰もいませんよ。そうは言っても中秋節にお手伝いさんをさがしている家は必ずあるものです。仲介屋に一人知り合いがおりましたんで、彼女の元を訪れました。向こうはちょうど中秋節の準備で大忙しで、こう言うのでございます。「あることはあるけれど、あんたには無理じゃないかな。というか誰にも勤まらないね、金持ちの華僑の家で、子供の世話なんだけど、条件がともかくめっちゃくちやひどくてね、まずは容姿端麗、子供をてなすけられなくちゃならない、三年契約でこの間昼夜一日たりとも休んでもらうては困る、給料は面接して決めるっていうんだよ。対談協議じゃあたしの出番はないよ、無駄に手伝うなんて御免だよ。ほかでも手伝いを探しているところはあるけれど、それも中秋節だけの臨時だね」あたしは老李がくれた菓子を彼女にやり、その華僑の家の住所を聞きだすと、自分で行ってみると申したのです。彼女は忙しくてお茶すら出してくれませんでした。

その華僑の家は見つかりました。なんとも豪華な邸宅です。守衛が誰に紹介されてきたのか、保証人はいるのかと聞きますので、もちろんいますよ、ご主人と直接お話をしたい、と申したのでございます。そしてこの家の奥様のと

ころに通されました。奥様は、上から下まで何度か目を走らせた後、子供はまだ病院にいるのだと仰りました。彼女は人が代わるのを嫌がってまして、子供が三歳の幼稚園に上がるまでの長期間、昼も夜も片時も離れずに見てくれる人を探していました。あたしが給料を尋ねましたところ「まず病院に行つて身体検査をしておくれ、それから子供と相性がいいかを見てからだよ」と言います。あたしは「東堂に行つて徐神父様に会う用事がありますので、半日お時間をいただきますとございます。そのあとは何もありません、あたしには係累縁者、何の縛りもございません。給料は最低で二十五元、保証人はおります」と答えました。

健康診断は空腹で受けなくてはなりません、ちょうどあたしは何も食べておらず、水一滴飲んでいませんでした。この奥様は私に着替えて顔を洗うようにと言ひ、それから病院に連れていき検査を受けさせましたが、何の問題もなく、健康であることがわかりました。保育士が赤ん坊を抱いてきましたので見ると女の赤ちゃんでした。その子に笑いかけると、まだ笑うこともできません、ですがちっちゃな手を伸ばしてあたしをつかむのです、仲良しになるという意思表示でしょう。奥様は私を家に連れて帰り、あたしの姓名や家の状況、保証人が誰であるか、子供を育てたことがあるかどうか等々を訊ねたのでございます。この赤ん坊は母乳ですが、寝るときはお手伝いさんと一緒なのでございます。給料ですか、毎月三十元、後で少しずつ値上げするということでした。お願いした先の半日の休みについては全く問題ありませんでした。

この日は中秋節でして、それで祝い金を二倍もらいました。趙家では三十元でしたが、ここでは初日に六十元、それからたくさん真新しい服をもらったのです。あたしは早速老李に手紙を書き、あの人に代わつて徐神父に告解をすること、それから節約して貯めたお金で買った毛糸で、欲しがっていた模様つきの上着を編んでやることを書き、

それから連絡先が代わったこと、従来通り毎月二十元を送ると書きしました。あたしらはまだやはり夫婦なのでございます。その後趙家に電話をかけて辞めることを告げました。

そしてまず乾媽と徐神父様に会う約束をとりつけてから半日休みをもらい、神父様に会いに行きました。あたしの話を聞いた後、神父様はいぶかるようにあたしを見て、あなたは奇特な女（人）だと仰りました。そして老李のために神に許しを請うから、あなたからもあの人に毎日神様に祈るように伝えなさい、神様は慈悲深いからと仰ったのです。そのうえであたしら二人に祝福をくださったのでした。あたしはこれを手紙に書いて送ると後はわき目もふらずこの華僑の家で頑張り、三年間働いたのでした。赤ん坊が幼稚園に入ったところで用済みとなりました。

この時の帰郷は、老李だけが温かく迎えてくれて、子供たちは二人ともあたしとは疎遠になっておりました。おっかさんは内孫だけしか眼中になく、姉さんの三人の子供はいずれも肉付きよくしつかり育っておりました。老李が言いますには、姉さんは金を稼いでも送金してこず、おっかさんはうまいものがあればまず姉さんの子に与え、大宝と小妹は後回しだということでした。三人の子供は何でも争い、しょっちゅう取っ組みあいの喧嘩をしておりました。大宝と小妹は仲が良くて、一緒に遊び一緒に食べ、大きいのは小さいのを守ることも知っておりました。あたしは、子供たちが大きくなったからと言いつくおっかさんと一緒に二晩眠り、そのあと再び北京に稼ぎに出たのでございます。これ以後あたしは外に行つて金を稼ぐだけの存在になり、家に戻っても家からまた出かけても、皆は気になくなくなつたのでございます。

老李は、癱子はもう死んでしまい、癱子の妻の小周^{シヤウジウ}がおっかさんを義理の母とみなしてよくやってきて面倒を見ていたと言いました。老李は今でもあの女^{ひと}と一緒にだったのでございます。この細い目につぶれた鼻をした周^{シヤウ}姨【周おば

さん」にはあたしも会いました。あたしに遥かに及びませんよ、でも性格は正直でございました。老李はまだあたしに未練があるのですが、近寄る勇気がないのでございます。あたしはきっぱりと拒否してしまったことを後悔いたしました。あの人が嫌いなわけではなかったのですから。徐神父の祝福は、二人がもう一度一緒になることを願うてのことだったのでしょうか。思い出してみても後悔しかありません。

姉さんが必要な金を送つてよこさないで、三人の子供はいずれもあたしの金に頼ることになり、それで老李はもう我慢できなくなつておりました。あの人には一人友がありまして、町で食堂を開いており、手伝つてくれないかと誘つてきましたんで、それであの人是大宝と小妹を連れて町に出ていきました。大宝は甕工場に徒弟として働くことになり、小妹は小学校に上がりました。あの人手紙を書いてよこす時に、いつも最後に「小周から李奥さんによろしく」と添えてありました。小周も一緒に町で働くことになったのでしよう。もしあたしが戻つたならば、あの女（ひと）も他の人に嫁ぐかもしれない、老李は友人との商売が繁盛しているので、あたしに帰つてくれればよいと申すのでございます。あたしは曲がり角で曲がりそこない、意固地になつて断りました。毎年親戚巡りをするように故郷に戻り、それから町にも行きました。老李は土地を買い、家を建て、大宝は労働者となり給料もなかなかのものでした。この子は、きれいで華やかない娘と恋愛をしておりました。あたしは二人のために老李の新しい家の上にもう一階建て増してやりました。二人が結婚すると、あたしはわざわざ町に行き、新郎新婦から叩頭の挨拶を受け、姑となつたのでございます。老李はわざわざ一間をあたし用の部屋として整えてくれました。家具はすべて老李の誂えでございます。小妹はインテリア業の個人経営者を見染めて、まだ結婚年齢に達していなかったのですが、北京に駆け落ちして一緒に住み始め、金をたくさん儲けましてね、あたし自身もお金をかなり貯めました。最後にあたしが仕えまし

たのは半身不随のおばあさんでして、娘も息子も国外に出ており、一か月前にこの世を去ったのですが、あたしに大金を残してくれました。おばあさんは世を去る前に「李さん、あなたは一生他家のために苦労して、自分ではアイスキャンデー一本でも惜しんでお食べになりませんでしたね。今度こそ家に戻って幸福に暮らせませうね」と仰ったんです。ですけれど、いったいどこに帰ったらよいのでしょうか。あたしは苦い水の中にどっぷり浸かって育ちました。金を稼ぎ、金を節約し、金をためることに一生を費やしてきました。今、手元には大金がありますが、これを何に使えばよいのでしょうか。老李を手伝って商売をやって、金を入れた所であの人はそれを他の女ひとに使うのだから、それはしたくはありません。息子夫婦を手伝って子どもを見てやるのは、給料なしでただ飯を食うわけでして、その上養ってやっているなんて言われますから、これも嫌でございいます。振り返って見ますと、一九六八年、あたしが十八の時、老李に嫁ぎ、一九七二年二十二歳に北京に働きに出ました。この五年があたしの生涯で一番幸せな、甘い思い出です。つばいの五年でございました。一九七五年、二十五歳の時老李と名目だけは夫婦になりました、今一九九五年あたしも四十五歳、中年になりました。人様の手伝いをして金を稼ぎ、家に戻るのは借金を返済するためだけなのでございます。お手伝い業をやったあたしも贅沢になりました。ご主人について居心地の良い部屋に住み、おいしいものを食べるのでございます。あの華僑の赤ちゃんを世話した時など、高級レストランで行かなかったところがありました。か。あらゆる娯楽施設にも行き、各地の景勝地もみんな行ったのでございます。でもあたし自身はお金を上手に使うことは苦手です、第一もったいなくて使えません。手元の大金を持っていても、使うこともできず、人にもあげたくありません。当初毎月ほんの二十元の給料のために、一生の幸せを捨ててしまったのです。今取り戻そうにも取り戻せないでございいます。

あたしはもう寿命の半分を越しております。先の半生は苦しいものでした。最も幸せだった五年間でも、食べ物にも着るものにもこと欠き、労働は辛くて本当に苦しかったのでございます。そのあとの半生は、楽をしましたがそれも他人様の家の飯を食っていたわけです、夜よく眠れないまま昼間は働かなくてはなりませんからやはり大変疲れておりました。あたしには本当に芥子粒ほどの命しかないのでしょうか。それでも神様を信じているのでございますよ。あたしが苦しむのは、だれのためにどんな罪をあがなったのでしょうか。ただ老李に罪を犯させるだけでございます。人間は本当に哀れな生き物でございます。金がないと苦しみ、金ができたらいやがらないのです。あたしは一生を何のために生きているのでございましょうか？

(一九九五年 秀秀の口述)

注

(1) 原題「她的自述」『走到人生边上——自问自答』(北京・商務印書館、二〇〇八年) 収録。

(2) (注1) 前掲書。

(3) その後も引き続き短いエッセイは書き続けられ、二〇一四年には小説『洗澡之后』(『洗澡』の続編)を書いている。二〇〇八年以降に書かれたエッセイ等は、『楊絳文集』(人民文学出版社、二〇〇三)や幾冊かの散文集から漏れていた作品も含めて『雜憶与雜寫 一九九二—二〇一三』(生活・讀書・新知三聯書店、二〇一五)としてまとめられている。

(4) 例えば、このエッセイを書いた動機について前書きで次のように述べ、「生、老、病、死(生を得て老い、病を得て死ぬ)は人生の規則であり、だれも逃れることはできない。『老即是病(老いが即ち病である)』というが、老人は別の病にもかかる。無病で生涯を終えられれば本当に幸運である。あるいは病氣にかかった途端に死ねばそれもまた大変な果報者だといわれる。生きている者が病人との別れを忍び難く思っても、病人が亡くなると「解脱した(抜け出した)」という。『抜け出した』のは誰なのだろう。まさか病人の遺体ではないだろうが。この遺体だつて自ら歩くことはできない。誰かに担が

れ、だれかに埋められるのである。生きている者はだれしも死者が「走好（安らかに歩いていける）」ようにと願う。死んでいるのに誰が歩くのだろうか。遺体のほかには誰もいない。言葉を換えれば、私が死んだならば私は遺体を抜け出ることなのか。まだ歩けるということなのか。ではどうやって歩いたらよいのだろうか。どこに歩いていくのだろうか。

わたしにはわからない。これまでわからないことはよく脇に置いて考えないことにしていた。でもわたしはすでに人生の際まで来てしまっている。自分で考えてわからないことは人に尋ねればよい……」

そして、こうして尋ねてみたところ、大方一致して「死んだら何もなくなる」という答えが返ってきたというところで、死んだ後で魂が存在するか否かの問題へと論を展開する。まず「命」と「靈魂」という言葉に相当する英米語、古英語、フランス語、スペインの単語を中国語に訳すと「靈魂」と訳される、つまり「生命」と「靈魂」は区別されない。人々は「靈魂」がないとはいうが、「生命がない」とは言わない。そこから「生命はある」、つまり、「靈魂の不滅」という考え方を導き出す。このような手法をとっている。

(5) 楊絳としては魂の不滅を願っているように読める。

(6) そのうちの一篇「窮困人」は「貧困で苦しむ人々」の邦題で本紀要第三十八号（二〇二三年六月）に訳出した。

(7) 楊絳は今回の「注釈」のひとつにはいつている回想録「勞神父」（邦訳「ルイ神父」）は『慶応義塾大学日吉紀要 中国研究』第18号収録）等で東呉大学学部時代に論理学を学んだことを述べている。また一九五〇年代に当時所属していた中国科学院の要請で夫錢鍾書とともにアリストテレス『詩学』の翻訳に携わっており、一九九八年には夫を失った悲しみに打ち勝つために『バイドン』を英訳から翻訳刊行している。（二〇〇〇年四月に『斐多』『バイドンの中国語音訳』簡体字版が遼寧人民出版社、繁体字版が香港天地圖書公司より刊行）。尚、楊絳は一九五〇年代に錢鍾書とともにアリストテレス『詩学』の翻訳作業に携わっている『走到人生边上』に論理学とレトリックの枠組みがどの程度使われたのかは定かではないが、第一部に当たる本論での生死の境や肉体が消滅した以降の「魂」の消滅／不滅についての議論は、生物科学の観点からではなく、ロゴス（言葉）によって世界の構造を探究しようとする西洋論理学に依った記述方法をとろうとする意識が感じられるが、中国社会の一般通念、社会道徳との接点へと議論が流れるため、よりレトリックに頼る文章になっている、いわば論理とレトリックが混乱した形で同居している感がある。哲学的探索の精緻さよりは挿話の妙に注目して読むのが良いのではないかと思う。

(8) 事実「良心」についての章は、初めに結論ありきの一般常識に沿った道徳論に陥っているように感じられる。

(9) 「楊絳生平与創作大事記」「楊絳全集」第十卷、人民文学出版社、二〇二二年、四九八頁。

- (10) これらの散文について楊絳は「自序」にて、「思索の過程でいくつかの書きうる散文のテーマを思いついた。本文の草稿が書きあがった時に、これらの散文を「注釈」とした。なぜならばいずれも本文の注となるものだからである」と述べている。
- (11) 文章の最後の日付によるが、夫錢鍾書の病中であつた時期と重なることからこれを聞き書きの日付と見て間違いないと思われる。
- (12) 二〇〇四年刊行『楊絳全集』（人民文学出版社）は全集と言いつつ楊絳が収録には妥当ではなかった作品が削除されている。「她的自述」が、「私の創作ではない」との但し書きをつけられながら削除されていないのは、一つの作品として重視されているからだとみてよいだろう。尚『楊絳全集』全十巻が作家の死後二〇二三年に補充改訂されて刊行されている。こちらにも「她的自述」は収録されている。
- (13) 「林奶奶」（一九八四）、「順姐的、自由恋愛」（一九九一）、またこの作品の後になるが「方五妹和她的、我老头子」（一九九七）等。
- (14) 楊絳が唯一認めた伝記『聽楊絳談往時』（生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇八、増補・改訂版二〇一七）の著者、呉学昭さんとの電話でのやり取りで直接お聞きした。呉さんによると、この介護人は、手先が器用で病人の扱いがうまい人だったという。
- (15) 「事実—故事—真実—読小説漫論之一」初出は『文学評論』一九八〇年第三期のち「事実—故事—真実」として『閑与小説』（生活・讀書・新知三聯書店、一九八六年）収録。
- (16) 例えば「老王」（一九八四）では、病をおして酢と卵を送り届けに來た三輪車引きの老王に對し感じた落着かなさの正体を、「數年が過ぎてだんだんにわかつてきた。あれは幸運に恵まれた者の、不幸な者へ對する慚愧であつた。」と述べている。
- (17) もちろんこれは『走到人生边上』の刊行から八年を経て、世界が様変わりした状況にある私の読みである。ただ本来読むという行為はそういうものであろう。
- (18) 原題「小癩子」。「小癩子」は楊絳の命名。まず一九四九年に英語からの重訳、翌年出版。一九七八年スペイン語からの訳で人民文学出版社より出版。一九八五年にスペイン語最新版を底本に旧訳を改訂、翌年改訂再版。
- (19) 楊絳訳の題名は「吉爾・布拉斯」。まず一九五四年『世界文学』雑誌に連載（未見）、その後大幅修正を経て一九五六年、人民文学出版社より刊行。文革後の一九七九年二刷、一九八二年五刷が出た時に、序文が加筆修正され、その修正版とともに

に二〇〇四年『楊文集』（人民文学出版社）に収録。楊絳の死後二〇一八年八月に単行本として人民文学出版社から刊行されている。

- (20) 中国語題名は『堂吉訶徳』。一九五七年に外国古典文学名著叢書編集委員会より英訳からの翻訳を命じられる。その後知識人への批判が激し、学術論文執筆をやめ、密かに独学でスペイン語を学び始める。一九六五年「ドン・キホーテ」第一部を訳し終え第二部に取り掛かるが翌年原稿を没収される。一九七〇年「ドン・キホーテ」の原稿を取り戻し、一九七二年より最初から訳し直す。一九八八年四月の人民文学出版社より出版。一九八五年末に修正改訂版を刊行。一九九五年さらに修正を行う。『楊絳文集』に収められているのは一九九五年の修正版。

- (21) 原題「紹介『小癩子』」。初出は『読書』一九八四年第三期。後『関与小説』（注15）前掲書に収録。中国においてピカレスク小説を初めて本格的に取り上げた優れた紹介となっている。

- (22) 「紹介『小癩子』」（注15）前掲書、一〇一頁。

- (23) 「事実——故事——真実」（注15）前掲書、九頁。

- (24) 「紹介『小癩子』」（注15）前掲書、八十五頁。

- (25) 秀秀の父方の曾祖父。「はじめに」参照。

- (26) 「奶奶」にはいくつかの意味がある。ここでは父方の祖父のすぐ下の弟の妻を指す。

- (27) 母の兄弟で一番上の兄。母方の伯父。

- (28) 華北と華南の境界を流れ、長江と黄海に注ぐ。

- (29) 足の指を折り曲げてかかととつけるように人口骨折させ、とがった先が小さいほどに「美人」のあかしとして珍重された。

- 「纏足」は漢民族において宋代より盛んになりその後時代が下ると良家の娘のみならず、労働者階層まで広がった。近代化を阻む悪しき風習として民国に入り廃止される。

- (30) 原文「進」。安徽省の伝統的な民家の造りで、門をくぐった最初の中庭に面した建物を一進といい、重層構造になった次の中庭に面した旨を二進、と数えていくという。

- (31) 「弟を招く」という意味。

- (32) 安徽省徽州では明代塩の売買に始まり金融業が繁栄した。

- (33) 「招弟」という名前のおかげで弟が呼び寄せられて生まれたということ。男の子が生まれるようお願いをかけて女の子に命名することはよくあった。

- (34) 人民解放軍兵士が着用した八つの頂点を持つ帽子。人民解放軍の象徴でもある。帽子で男装していたということ。
- (35) 直訳は「狐の精」妖婦の意味。
- (36) 原文は、掃帚星、彗星の俗称。不幸を招き寄せると信じられていた。
- (37) 一九四九年の春節、すなわち農歴の正月は一月二十九日。干支を農歴を基準にした場合でも二九日以降の生まれであれば丑年生まれとなる。立春を干支の基準にする地方もあるようで、その場合「立春前だったので」あれば子年になり、ここでは矛盾する。
- (38) 安徽省の伝統的民家の建築様式で、正面に「正房」（大家族で地位の高いものが住む）を置き、東と西に「廂房」を置く。
〔注30〕 参照。
- (39) 「釘」は「丁」と同音。
- (40) 虎の頭がついた幼児用の布靴、魔よけの意味がある。
- (41) 一九五九年、大躍進の失敗と自然災害によって引き起こされた大飢饉を指す。一九六一年まで続き餓死者は一五〇〇万、五〇〇〇万人ともいわれる。
- (42) 小麦粉を練って平たくして焼いたもの。
- (43) 農業生産合作社や人民公社で行われた報酬制度。
- (44) 「公社」は人民公社（一九五八—一九八二）。「文工団」とは「文藝工作団」の略。歌や踊りなどの文芸活動を通じて啓蒙宣伝活動を行った。
- (45) 安徽省を中心として発展した地方劇。中国五大伝統劇の一つ。
- (46) 中国語では「女大十八変」といい、女の子は成長するまでに十八回変わり、見違えるほどきれいになるという俗語。
- (47) 「無産階級文化大革命」の略。一九六六年五月から一九七六年まで中国全土で繰り広げられた政治運動。無産階級が主導して文化の革命を行うというスローガンのもとに従来の価値観がひっくり返され、それまで社会的に上層部にいたものが批判の対象となった。結果的には社会的な大混乱を引き起こし、十年の災厄とも呼ばれる。
- (48) 「反社会的組織」「反動組織」の意味。ここでは文化大革命のときに批判打倒対象となったそれぞれのレベルでの指導幹部を指す。
- (49) 文化大革命の際に作られ中国共産党公認の左翼イデオロギーを反映した八つ（実際には三十数種の）現代京劇風芝居。原文は「流離鬼」。さまよえる亡霊、幽霊の意味。芝居をやるものは定住せずに全国各地をめぐることから。
- (50)

- (51) 原文「李哥」。日本語の漢字がないため、意味をとって「兄さん」とした。
- (52) ウーという名のねえさんの意。語り手より少し歳が上の女性。血縁関係があるわけではない。
- (53) 「義理の母」の意味。必ずしも親族関係にあるわけではない。母親代わりとして呼ぶことが多い。
- (54) 北京旧市街地中心街、天安門の西側の地域。
- (55) 北京旧市街地中心地区、天安門の東側の地域。
- (56) カトリック教会。教会の建物は一九〇一年建立。文革時代は小学校として使われていたが、一九八九年にカトリック教会として再開されている。
- (57) 「幹部学校」。貧しい農村、山村地域に設けられ労働とともに政治学習を行わせた強制収容所。
- (58) おばさま、中年の女性を指す言葉、または父親の姉妹を指す。ここでは婿の二番目の妻、ということで奥様とした。次の説明にもあるように、「奶奶」（大奥様）は高級幹部の娘なので地位が高い。この奶奶の実の娘がおそらく「四妹」を残して亡くなり、そのあとで趙姓の婿が連れ子を三人持つ「姑姑」と結婚して（連れ子三人か）を引き取ったか。この辺の詳細は不明。
- (59) 原文「何嬢」。姓を何という女性。おそらく血縁関係はない。